

C・J・パンクツクとフランス革命前夜の新聞・雑誌

森 原 隆

はじめに

新聞・雑誌を核にしたジャーナリズムに関わる諸問題は、出版報道の自由を背景にしたフランス革命そのものの分析の中でしばしば論議されてきたが、それでは革命前夜はいかなる状況におかれていたのだろうか。本稿は、一七七〇年代、八〇年代のフランス、すなわち広い意味での革命前夜といわれる時期のこの問題を、C・J・パンクツクというジャーナリストの活動を通して検討するものである。議論の最初にパンクツクという人物の当時の社会におけるイメージについて触れておきたい。

一八世紀フランスを代表する劇作家ル・サージュ Le Sage(1668-1747)の作品に『チュルカレ』Turcaret(一七〇九年)というピカレスク(悪漢)小説がある。⁽¹⁾主人公チュルカレは、大金持ちの太った徴税請負人。ルイ一四世晩年の退廃した時代を舞台に、金で官職を購入することにより私腹を肥す成り上がり者である。出世のためさまざまな策略を弄するチュルカレ、チュルカレに金を貢がせる男爵未亡人、未亡人に食いつく騎士、最後に漁夫の利を獲て成り上がるとする下僕フロンタンと、いずれも悪漢ぞろいという人物設定がなされている。フロンタンの「チュルカレ氏の時代は終わった。わしの時代がはじまるのだ」という幕切れの叫びは、革命前夜におけるボーマルシエ Beaumarchais(1732-

1799)の有名な「フィガロ」Figaro (一七八四年)の不穏な精神に先行するものであり、この作品は一文学作品という評価を超え、当時の社会情勢、世相を知るうえでの価値を併せ持っている。一般にル・サージュはフランス文学・思想史上初めて文筆業のみで世渡りした文人であったとも言われ、チュルカレのイメージは以後のフランス社会においてかなり人口に膾炙したものであった。

時代は下って、のちの革命前夜から革命の動乱の時代において、このチュルカレさながらに成り上がり、出版・書籍業で繁栄を極め、革命家ブリソーBrissotやカシーユ・デムランCamille Desmoulinsなどから「文学のチュルカレ」Turcaret littéraire、あるいは「政治のヤヌス」Janus politiqueと激しく攻撃された人物がいる。⁽²⁾これが本稿のシャルルジョゼフ・パンクックCharles-Joseph Panckoucke(1736-1798)である。パンクックの名は、フランス啓蒙時代の社会・思想・文化史研究において必ずしも目新しいものではない。すでにこの時代を代表する出版業者としての活動が知られており、例えば有名なデイドロ、ダランベール編集の『百科全書』の再版刊行(一七六八年)、『系統的百科全書』Encyclopédie méthodiqueの出版(一七八二—一八三〇年)、ビュッフォンBuffonの『博物誌』Histoire naturelleの刊行、などを手懸けたのが他ならぬパンクックであった。⁽³⁾実際にわが国の『百科全書』を分析、紹介する研究書・翻訳などにもしばしばその名は散見される。⁽⁴⁾しかしながら、パンクックが革命前夜のフランスで「ジャーナル帝国」Empire journalistiqueと称せられるほどの繁栄を築いた新聞・雑誌の改革者であり、『ジュネーヴ誌』Journal de Genève (一七七二年)、『ブリュッセル誌』Journal de Bruxelles (一七七四年)の創刊を皮切りに、一七七八年にはフランス第一の文芸誌『メルキュール』Mercure de Franceの経営に乗りだし、八七年にはついにフランスの代表的新聞『ガゼット』Gazette de Franceを獲得するなど、文字通りジャーナリズム界の立て役者であったことは余り知られていない。⁽⁵⁾さらに革命期においても、革命の議事録とも言われる有名な新聞『モニトゥール』Gazette national ou Moniteur universelleの出版者として重要な足跡を残しているものの、こうしたパンクックのジャーナリストと

しての側面について言及したのも管見のかぎりでは殆どない。

本稿はこうしたわが国における研究の現状を鑑みながらも、パンクックの活動の全貌を考察対象にしようとするものではない。出版書籍業者としての広汎な活動、著名なフィロゾーフとの交流、出版物の内容分析など個別のテーマにも検討があつてしかるべきと考えられるが、これは筆者の能力や関心を越えるもので今後の多方面からの研究を恃むこととして、本稿ではこのジャーナリスト・パンクックという視角から捉えてゆきたい。また時期を一七七〇年代、八〇年代すなわち革命前夜までとし、当時のフランスの新聞・雑誌を核にしたジャーナリズムの実態から照射してゆきたいと考える。「チュルカレ」や「政治のヤヌス」などの呼称で揶揄された彼の背徳や二面性などの評価はともかくとして、その特徴的な性格はジャーナリズム活動にも反映しているはずであり、併せて考察の対象となるであろう。筆者は、すでに拙稿において一七五〇年代のフランスの新聞・雑誌の状況を論じているが、時期的な意味で本稿はその続編となるものである。⁽⁶⁾

一、一七七〇年代、八〇年代のフランスの新聞・雑誌——「ガゼット」より「ジュルナル」へ——

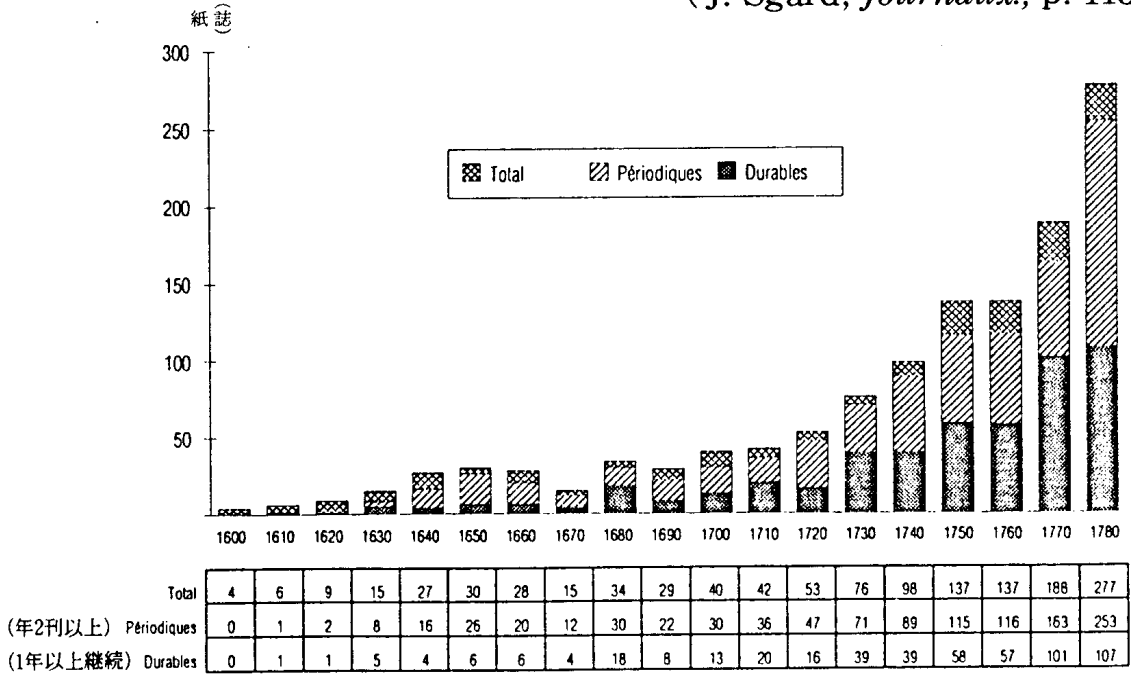
パンクックの検討に入る前に、まずパンクックの本格的な活動の行われた一七七〇年代、八〇年代のフランスの新聞・雑誌の全般的な状況について、近年の研究成果に依拠しながら概観しておきたい。

いわゆる「アナール派」*les Annales*の「書物と社会」グループ *Livre et société*の研究に触発されて、一九七〇年からリヨン第二大学(P・レタ)を中心におこなわれてきた共同研究(「アンシャン・レジム期のフランスのジャーナリズム」)は、一九九一年の『ジャーナル辞典』*Dictionnaire des Journaux*(一六〇〇—一七八九年)刊行によって、この共同研究のいわば集大成ともいふべき成果を提出した。⁽⁷⁾これは一六〇〇年から一七八九年の間に出版されたフランス語定期刊行物一二六七点について、①タイトルの変遷、②刊行年、定期性、特認 *privilege*・認可 *approbation*

の時期、③分量、判型、④刊行地、編集者、出版者、書籍業者、購読料、購読者数、部数、⑤創刊者、監督者、協力者、⑥序言内容、記事の性格、⑦所在地、⑧関連文献、等をアルファベット順、項目別（責任執筆）によって網羅的な説明を加えたものであり、すでに刊行された『ジャーナリスト辞典』 *Dictionnaire des Journalistes*（一九七六年）⁽⁸⁾と共にこの時期のフランスの新聞・雑誌を検討するうえで史料的价值をもつ研究文献となった。さらにこの本書の後記には、調査対象の定期刊行物全体の分布と類型について、この共同研究の特徴でもある数量的な分析が施されており、興味深い結果が提示されている。⁽⁹⁾本章では、主にこの分析結果に依拠しながら以下の二つの点について考察を加えておきたい。まず第一点はアンシャン・レژیム全体及び革命前夜における新聞・雑誌の流布状況についてである。

下記の第一表は、「アンシャン・レژیム下のフランス語の新聞・雑誌の創刊状況」をグラフ化したものである。この統計は二〇年以上にわたって各地の古文書

第一表 アンシャン・レژیム下のフランス語新聞・雑誌の創刊状況
(J. Sgard, *Journaux.*, p. 1136.)



館、図書館、資料館等で渉猟された当該期の新聞・雑誌を基礎に導出したものであり、従って今後も部分的な補足、訂正は行われるにせよ、近年の研究の一つの到着点として評価・検討する必要がある。こうした新聞・雑誌の動向の中で、共同研究はとくに次の四つの時期を画期と規定している。¹⁰ すなわち、1、一六四〇―一六〇年代のいわゆる「フロンズの乱」期。2、一六八〇―一七〇〇年代の「ナント勅令廃止」期。3、一七三〇―一四〇年代の、イギリスの影響を多分に受けた文芸ジャーナリズムの勃興期。4、一七五〇―一六〇年代の「百科全書」期、である。各時期の動向の詳細については別稿に譲るとして、本稿の扱う一七七〇年代―一七八〇年代に焦点を絞れば、その一般的特徴は、一七五〇年代より顕著になっていた新聞・雑誌の多様化や専門化、さらに流通の広域化（地方新聞）が加速され、量的側面で飛躍的な発展が見られたことにある。¹¹ 例えばこの傾向は表に明示された創刊数ばかりではなく、発行部数においても特徴的に表れている。というのも新聞・雑誌の部数は、一七世紀段階で一〇〇〇部を超えるものは殆どなく一八世紀前半においても多いもので二〇〇〇部程度であったが、一七五〇年代以降これを大きく超えるものが出始め（『ガゼット』Gazetteの例）、七〇年代には、後論の『ジュネーヴ誌』Journal de Genèveの五〇〇〇部（一七七六年）、『クーリエ・ド・リヨンプ』誌Courier de l'Europeの六〇〇〇部（一七七六年）、『アナル・ポリティーク』誌Annales politiquesの一万部（一七七六年）等、爆発的に増加しているからである。¹² 創刊数からみれば、八〇年代以降もこうした新聞・雑誌の膨張は継続し、革命前夜に頂点に達している（後述の第三表参照）。革命の勃発期とされる一七八九

第二表 アンシャン・レژیーム下のフランス語新聞・雑誌のタイトル別分類
単位：紙（誌）

Journal	163
Gazette	91
Courrier	75
Affiche	62
Nouvelles	47
Mercure	43
Mémoires	36
Feuille	34
Bibliothèque	31
Correspondance	18
Spectateur	18
Histoire	15
Observateur	15

（Ibid., p.1131, より作成）

年だけで二五〇紙（誌）以上の新聞・雑誌が誕生することを考え合わせれば、革命前夜は、新聞・雑誌についても出版の自由の前夜を呈していたと言えそうである。⁽¹³⁾

第二点は、新聞・雑誌のタイトル及び性格に関わる問題である。アンシャン・レジーム期全体において、いかなるタイトル、性格の新聞・雑誌が出回っていたのだろうか。第二表は新聞・雑誌のタイトルに多く使用された名辞の順位表である。ここで注目すべきは、

第三表 アンシャン・レジーム下のジュルナル数
(J. Sgard, *Journaux*., より集計・作成, 各ジュルナルについては附表を参照のこと)

1640年代	3紙(誌)
50	2
60	3
70	4
80	7
90	3
1700	2
10	3
20	2
30	4
40	7
50	18
60	21
70	34
80-89	63
計	176

圧倒的に多い「ジュルナル」*Journal*とそれに次ぐ「ガゼット」*Gazette*というタイトルであろう。ジュルナルという語などの今日的な用法をみれば、これは一見当然のことのようにも思われるが、しかしながら、なぜジュルナルやガゼットをタイトルにするものが多かったのか俄かには説明が困難である。リヨングループのJ・スガールの指摘によれば、ことに「ジュルナル」が新聞・雑誌のタイトルとして多く使用されるのは一七三〇年代以降のことであり、次第にあらゆるジャンルに適用されていったという。⁽¹⁴⁾ この点を厳密にするため、ジュルナルをタイトルにもつ新聞・雑誌の数を独自に集計したものが第三表である。サンプル数自体が当初は少ないので明確な画期を措定するのは困難であるとしても、これによってもジュルナルの増加は、一八世紀後期フランスの定期刊行物界の顕著な特徴といっても過言ではなさそうである。そこで、ジュルナルというタイトルの隆盛を念頭におきつつ、ジュルナルの増加が新聞・雑誌のいかなる変化を意味するのかについて検討するため、さらに新聞、雑誌をタイプ別に分類し、時期的な推移を見てゆきたい。

第四表 アンシャン・レジーム下のフランス語新聞・雑誌のタイプ別分類〔単位：紙(誌)〕

(*Ibid.*, pp.1131—1135, より作成)

—時事情報紙(誌)〈presse d'information〉	450—	①「ガゼット」	Les gazettes	80
		②「アフィシユ」	Les affiches	87
		③「一般情報紙(誌)」	Les journaux d'information général	75
		④「政治紙(誌)」	Les revues historiques et politiques	200
—文化紙(誌)〈presse culturelle〉	580—	⑤「学術誌」	Les bibliothèques savantes	46
		⑥「文芸誌」	Les revues littéraires	140
		⑦「文学拾遺誌」	Les choix littéraires	40
		⑧「新聞・雑誌選」	Les anthologies de presse	23
		⑨「エッセイ集」	Les spectateurs	76

〈専門雑誌 journaux spécialisés〉 文献学 presse bibliographique(12),
 商業 commerce(25), 美術評論 critique d'art(13),
 経済, 農学 économie, agriculture(21)

第五表 各二次カテゴリーの時期別創刊数 (*Ibid.*, pp.1131—1135.より作成)

(各25年期)	1600	1625	1650	1675	1700	1725	1750	1775-89
① les gazettes	2	9	6	10	5	11	21	16
② les affiches		1	0	2	1	5	43	35
③ les journaux d'information général				2	3	9	14	47
④ les revues historiques et politiques	3	3	4	8	10	22	18	32
⑤ les bibliothèques savantes			8	14	10	7	7	0
⑥ les revues littéraires			3	3	24	48	39	23

第四表は、同共同研究の統計に基づく「アンシャン・レジーム下のフランス語新聞・雑誌のタイプ別分類」である。この表は、まず判別可能な一〇三〇の新聞・雑誌を、その内容や性格によって、1、「時事情報紙(誌)」*presse d'information* (四五〇) 2、「文化紙(誌)」*presse culturelle* (五八〇) という一次カテゴリーに大別し、さらにそれぞれを①「ガゼット」、②「アフィシュ」以下の二次カテゴリーに分類したものである。ここでは各二次カテゴリーの分類に沿って、とくに一七七〇年代、八〇年代の新聞・雑誌の動向を検討したい。

まず「時事情報紙(誌)」について、①「ガゼット」*Les gazettes* は言うまでもなく、一六三一年にT・ルノドー *Renaudot* によって創刊されたフランス最初の新聞に端を発する時事情報紙であり、内外の外交・宮廷・政治ニュースを短い周期性(週刊、週二・三刊)で伝えるものであった。⁽¹⁵⁾ その他、*Nouvelles*, *Courier* などのタイトルにも類似のものがみられるが、*Gazette* というタイトルをもつ定期刊行物の大半がこのカテゴリーに属する。第五表は、各二次カテゴリーの時期別(二五年毎)創刊数であ

るが、これに見られるように、ガゼットタイプの新聞はアンシャン・レジーム期全体を通じて多いけれども増加の度合はさほどでもなく、七五年以降はむしろ停滞している。②「アフィシュ」Les affiches は、一般的に一七五二年にパリで発行された『地方アフィシュ』Affiches des Provinces を模倣して地方に続々と誕生していった広告、雑報新聞である。⁽¹⁶⁾同第五表にみられるように、このジャンルの地方新聞は一七五〇年代から激増し、七〇・八〇年代にも受け継がれた。③「一般情報紙(誌)」Les journaux d'information général は、やや漠然としているが、特定のジャンルに拘泥せず一般情報(文学、科学、社会生活等)を扱ったものであり、タイトル面から見れば、文字通り「ジュルナル」Journal をタイトルにもつ定期刊行物が五〇誌を占め、その他「クーリエ」(八誌)がこれに次いでいる。第五表によると、このジャンルも五〇年代から顕著に増加し、さらに七〇年代から激増する。この激増には、右記の『地方アフィシュ』の多くがタイトルを「ジュルナル」に変更することによって紙面を刷新し、このカテゴリーに参入していったことも含まれる。⁽¹⁷⁾時事情報誌中、最も多い④「歴史・政治批評誌」Les revues historiques et politiques は、注釈、批評を加えたいわば政治紙(誌)であり、一般的にはフロンドの乱時(三五誌)と革命直前(六〇誌)に激増しているのでこれを除いた約一〇〇誌の傾向をみたものが同第五表である。この政治誌の一つのモデルは、一六八九年にハーグでクルチル・ド・サンドラ Courtilz de Sandras によって創刊されたプロテスタントの『歴史・政治・メルキュール』Mercure historique et politique (一六八八—一七八二年)にあるといわれており、⁽¹⁸⁾Mercure というタイトルを始めとして、Histoire, Nouvelles, Mémoires, Lettres など様々なタイトルが使用され、「歴史的・政治的」historique et politique、または「政治的」politique という形容詞表現を伴う場合が多い。第五表によると、このジャンルは革命前夜の七五年期から急増するが、後論のように、ここにも一七七〇年代から「ジュルナル」Journal というタイトルをもつ政治誌が多く登場し、ジュルナルの増加に拍車をかけることになる。

一方、「文化紙(誌)」presse culturelle については、⑤「学術誌」les bibliothèques savantes に注目しておき

たい。このタイプの学術誌のモデルは一六六五年に創刊された『サヴァン誌』*Journal des savants*である。しかし『サヴァン誌』に付与された特認 *privilege* のもつ独占的な権利によって、『サヴァン誌』のタイトルである「ジュルナル」をフランス国内の他の雑誌が使用することは当初のうちは制限されていた。よって全体から見てこのジャンルで最も多く使用されたタイトルは、*Bibliothèque* (二〇誌) であり、その他、*Histoire*, *Mémoires* などである。また、このジャンルの雑誌の創刊は一八世紀後半以降減少している。文化誌中、最も多いのは⑥「文芸誌」*Les revues littéraires* である。このモデルは一六七二年に創刊された『メルキュール・ギャラン』*Mercure galant* に求められ、以後の『メルキュール』誌の繁栄と共にこのジャンルの雑誌が当時の社会において最も人気の高いものであったことはよく知られている。しかし、このジャンルの最盛期は一七三〇年代から六〇年代までであり七〇年代以降は下火になる(第五表参照)。

以上、新聞・雑誌のタイトルとタイプに関する数量分析から、アンシャン・レジーム期全体及び一七七〇年代、八〇年代の特徴を剔出すれば、新聞・雑誌の多様化や専門化に伴って、③「一般情報誌」、④「政治誌」、②「地方新聞」の増加が顕著になっていることであり、重要なのはこのいずれにも前述のジュルナルをタイトルにもつ定期刊行物の急増との関連が推定されることである。一八世紀後期のジュルナルの隆盛は、こうしたジャンルの新聞・雑誌の隆盛でもあったのである。

最後に、このようなジュルナルの増加につれて、ジュルナル *Journal* の概念そのものにも一様の変化が見られることを指摘しておきたい。言うまでもなく「ジュルナル」の語は「ジュール」*Jour* (日) の同族語として、この意味で「日誌(航海日誌、商売代帳等)、日記」というような一般的な意味をもっている。L・トレナールによると、すでに一六世紀のモンテーニュ *Montaigne* (1533—92) や J・アミヨ *Ameiot* (1513—93) の時代に「日々書き留められるもの」という意味で使用されており、一六〇九年に出版されたニコ *Nicot* の『フランス語の宝』*Thésor de la*

langue françaiseでも、「ジュルナル」とは、「今日のこと」〔中略〕ジュルナルはまた、日々の書類であり、商人や銀行家が毎日その交渉を書き留める帳面である」という説明がなされている。⁽¹⁹⁾ 実際にフロンドの乱時に発行されたマザリナード Mazarinades のうちジュルナルというタイトルをもつのは二四誌を数え、一六五二年にド・サン・ジャン San Jean が創刊した雑誌に、「ジュルナル」というタイトル（後述の附表の⑤ “Journal contenant les nouvelles de ce qui se passe de plus remarkable dans le royaume pendant cette guerre civile à Paris”）が採用されているのを見ただけでも、不定期のビラ、パンフレット類のタイトルを中心にジュルナルなる名辞が幅広く使用されていたことが窺われる。しかしながら、このジュルナルに今日のような新聞・雑誌という代表的な意味を決定的に付与したのは、前述の一六六五年にD・サロ Sallo が創刊した『サヴァン誌』すなわち（附表の⑦）『ジュルナル・デ・サヴァン』 Journal des savants である。⁽²⁰⁾ ここで『サヴァン誌』について詳論する余裕はないとしても、とりあえず本稿に関わる範囲内でその創刊の背景について少し振り返っておきたい。

そもそも『サヴァン誌』創刊以前はまだいわゆる科学・学術雑誌 *Presse scientifique* が存在しない時代であり、学者などがこうした学術、書籍情報を得ようとすれば普通は個人的な通信に頼るか、あるいはフランクフルトなどの定期市のカタログを入手するというような方法しかなかった。⁽²¹⁾ 『サヴァン誌』は、これら学者、学問愛好家などの意向を受け、またコルベール周辺の「プチト・アカデミー」 *Petite Académie* などの協力を得て、フランスばかりではなくヨーロッパにおいても最初の学術的定期刊行物として誕生した。『サヴァン誌』の当初の体裁は、四つ折り、一二ページ刷りの週刊誌（日曜刊）で、⁽²²⁾ 創刊号の趣意書 *prospectus* によると、その刊行の趣旨は「文芸共和国 *la République des Lettres* で新たに行われていることを知らせること」にあり、主に①ヨーロッパで刊行された主な書物の正確な目録、②著名な学者、文人の死への頌辞と著作目録、③物理学、化学上の実験及び技芸、化学上の新発見に関する情報から成り立っていた。この『サヴァン誌』は、当時としては非常に斬新な企画であるがゆえに様々な毀誉褒貶を受

け多くの論争を経験し、編集委員の交代も幾度となくおこなわれたが、他方で文化、学術の分野に多大な影響を与えることになる。アムステルダムで一二折りの海賊版『サヴァン誌』が出回り、これに類似した雑誌が次々と登場し（附表の②③④など）、ロンドンの「王立協会」Royal Societyが発行し始めた機関誌『哲学提要』the Philosophical Transaction of the Royal Societyもこれの模倣であったと言われている。⁽²⁴⁾ さらに、有名なピエール・ベイルPierre Bayleがロッテルダムで一六八四年から創刊した『文芸共和国便り』Les Nouvelles de la République des Lettres（1684-1718）や、その論敵であるJ・ルクレールLeClercの『世界通信』La Bibliothèque universelle et historique（1686-1782）なども『サヴァン誌』の競合誌としての性格をもって登場したものである。⁽²⁵⁾

かくして一六九五年に発行された『アカデミー・フランセーズの辞書』Dictionnaire de l'Académie françaiseの「ジュルナル」Journalの項目は、ジュルナル本来の定義（耕作の単位としてのジュルナル、日誌、毎日の出来事の報告）に加えて、当代の『サヴァン誌』に言及することで「ジュルナル」の新しい意味を次のように伝えている。「毎週、隔週、毎月印刷される著作物で、新刊書の抜粋や文芸共和国での記念すべきことを含む……」ものである。⁽²⁶⁾

ところで、このフランス第二の官許の定期刊行物の名称に「ジュルナル」の語が冠せられたことは非常に重要である。『サヴァン誌』の研究者R・バーンによると、一六三一年にフランス最初の官許の定期刊行物として誕生した『ガゼット』紙には「ガゼット」というタイトルが使用されていたために、二番目のこの刊行物には、「ガゼット」以外のタイトルを冠する必要があった。⁽²⁷⁾すでに第二表でみたような「クーリエ」、「メルキュール」等の使用が考えられたのだが、おそらくは「ジュルナル」という語本来のもつ迅速性や客観性（日誌）などによって『ジュルナル・デ・サヴァン』というタイトルが慎重に選択されたという。⁽²⁸⁾このようなフランスの定期刊行物のタイトルのもつ特異性は、「特認」制度に見られる絶対王政下の厳しい出版統制と密接な関連をもっている。すなわち、ある定期刊行物に正式な出版許可である特認が下りれば、原則的にはこれと同種の刊行物の出版はこの特権を犯すことになるので認められず（また

刊書の抜粋である」という定義と共に『サヴァン誌』に関する詳細な説明がなされている。⁽³³⁾ またジャーナリズム研究の先駆者となった同時代のカミュザ Camusat は、一七三四年の『ジュルナルの批判的歴史』 *Histoire critique des journaux* において「ジュルナル」を次のように規定している。ジュルナルとは、「一定の時期に規則的に現れる定期刊行物である。新刊の書物を報じ、これに含まれるものについての概観を与え、諸科学において行なわれている発見を保存するのに役立つ。一言でいえば、文芸共和国のなかで起こるすべてのことを集めた著作である」⁽³⁴⁾。さらに、ジュルナルの拡大のめられた五〇年代の P・リシュレ Richelet の辞典（一七五九年）の「ジュルナル」の項目では、同じく『サヴァン誌』に言及しつつ、『サヴァン誌』と同じ目的をもつ、もしくはなおもっている多くの他の定期刊行物に同じジュルナルの名前が与えられたが、サヴァン誌は他の全てのものよりも多くの名声と権威をもっている」と、『サヴァン誌』の権威に触れながらもジュルナルの拡大を追認している。⁽³⁵⁾ 少し極論して言えば、フランスの定期刊行物としてのジュルナルは、『サヴァン誌』に端を発する本来の一つの形式、すなわち書籍情報・書評誌であるのみならず技芸 Arts・科学 Sciences 情報誌でもあるという特徴をもっていたが、⁽³⁶⁾ 次第にこの規制をはみ出すジュルナルが増加していったということである。ガゼットやメルキュールのような固有名詞的色彩をもつタイトルの場合とは異なつて、ジュルナルには日誌などの慣習的な用法があり、こうした意味が定期刊行物のタイトルへの採用の拡大につながっていったことも看過されてはならない側面である。

一七五五年に刊行されたディドロ、ダランベール編集の『百科全書』第八巻の「ジュルナル」の項目には、日誌、商売台帳などの従来の意味に付け加えて「今日、ジュルナルの名は、ヨーロッパで日々起きていることの詳細を含んだある著作物に与えられている。『ガゼット』をみよ。」という定義がなされている。⁽³⁷⁾ これはジュルナルというタイトルが当時『ガゼット』のような新聞形式の定期刊行物にも拡大適用されていたことを示すものであり、多くの研究で引用されているが、⁽³⁸⁾ ジュルナルの慣習的な意味からすればむしろ当然の結果でもあったと言える。

辞書の記述やいくつかの証言のみで、長期的なジュルナル概念の変化を主張するのは少し無理があるにせよ、リヨングループの共同研究の基礎データを信頼すれば、「ジュルナル」の隆盛は明白であり、これにつれて、ジュルナル概念自体も微妙な変化を蒙っていたと想定される。フランス語の定期刊行物の歴史は、「ガゼット」に始まり、「ジュルナル」がこれに次いだ。前述のようにアンシャン・レージュム期の刊行物のタイトルに「ジュルナル」と「ガゼット」という語が多く使用されたのは、以上のような経緯を踏まえて初めて理解されるのである。しかし、現実には先行の「ガゼット」を凌駕して「ジュルナル」が顕著に増加した。特に一七七〇年代、八〇年代の「ジュルナル」の激増は、当時のいかなる状況の反映なのであろうか。この点についてはこれまでのような巨視的な数量分析とは異なる次元からの検討が必要である。本稿では、より現実の場に降り立って分析するために、このような一七七〇年代、八〇年代の新聞・雑誌の動向、とりわけジュルナルの隆盛に深く関わったジャーナリストの一人としてパンクックの行動に注目する。そして本稿の主人公であるパンクックに焦点を絞りながら革命前の新聞・雑誌の状況を考察してゆきたい。

二、C・J・パンクックのジャーナリズム活動

1、パンクックの経歴

わが国の研究には、筆者の知る限りではパンクックの経歴について触れたものは殆どない。よって一七七〇年代にパンクックが新聞界に乗り出すまでの経歴をまず簡単に紹介しておきたい。³⁹⁾

パンクックは、一七三六年一月二六日に書籍業者アンドレー・ジョゼフ・パンクック André-Joseph Panckoucke (1703-1753) の次男として北フランスのルールに生まれた。パンクック家は代々ジャンセニストの家系であり、また父アンドレはヴォルテールから出版を依頼されるなど時代の新しい精神の持ち主でもあった。最初パンクックは技師か教師を目指していたらしく、一七五〇年代初めにパリに出て数学を学んでいた。⁴⁰⁾ ところが、一七五三年に父親が

急死し兄セバスチャンも夭逝していたため（一七四六年）、父親の職である出版・書籍業を継ぐことを決意してリールに戻り、五九年には正式に書籍業親方職 *maîtrise de la librairie* の資格を獲得しこの地で幅広く出版・書籍業を営むことになる。パンクックがリールで出版したものには、当地の地方アカデミーの論文集、ルソーやビュッフォン擁護のパンフレットなど新思想に関連したものが多く、パンクック自身が文学協会 *Société littéraire* の活動家でもあった。またこの頃フランス各地で誕生していた前述の地方新聞『アフィシュ』 *Annales, affiches et avis divers pour les Pays-Bas français* をリールで刊行することによって、のちの新聞出版の緒口を切り開いている。⁽⁴¹⁾ しかしこのようなパンクックの活動は、当時カロンヌ *Callone* 地方総監のもとでカトリシズムの強かったリールの環境では大胆すぎたのか、ルソーの『エミール』 *Emile* を賛美する記事を掲載したことでリールの地方当局と検閲をめぐる紛争を起こし六週間の投獄処分を受けている。最終的にはこの地を追われる身となり、六四年にパンクックは二人の姉妹と共にパリへ再び出るようになった。⁽⁴²⁾

パリに着いたパンクックは、おそらくはヴォルテールの紹介によってすぐに『百科全書』の出版業者として有名なル・ブルトンの下で徒弟奉公 *apprentissage* の契約を結ぶ。⁽⁴³⁾ そして一週間後には、出版監督官 *Directeur de la librairie* マルゼルブ *Malesherbes* の仲介で一四〇〇リーヴルの支払いを通して書籍商 *marchand-librairie* の資格を獲得している。同年、書籍商ランベール *Lambert* の営業財産 *fonds* を一〇万リーヴルで購入し（一七六七年まで支払い）、六四年には同じく書籍商デュラン *Durant* の営業権を購入し、パリでも書籍業の地歩を築いた。⁽⁴⁴⁾ ことにランベールの財産には、前章で取りあげた『サヴァン誌』の他、フィロゾーフの敵対者として有名なフレロンが一七五四年から編集した『文芸年報』 *Année littéraire* や、一七五九年創刊の『先駆者』 *Avant Coureur* のそれぞれの「特認」が含まれていて、当面はこれらの印刷にのみ携わっていたものの、後の本格的なジャーナリズム活動に向けての貴重な財産を得た。⁽⁴⁵⁾ さらに一七六四年八月には国王印刷監督官 *Directeur de l'Imprimerie Royale* アニソン・デュブロン *Anisson-*

Duperron の個人資産を購入し、パンクック自身がこの組織の出版業者として国王刊行物の出版に加わることになる(七八年まで)⁽⁴⁶⁾。例えば「アカデミー・シヤンス」Académie des Sciences や「碑文・文学アカデミー」Académie des Inscriptions et Belles-Lettres などのアカデミー記録、ビュッフォン⁽⁴⁷⁾の『博物誌』(1767-70)、ラ・フォンテーヌの『寓話』Fable (1767)、プレヴォアの『旅行記』Voyage (1769)、モレリ Morel やトレヴーの辞典類など多様な出版を手懸けている。六八年にはポワトヴァン通りのトゥー館を出版の拠点に定め、ル・ブルトンより『百科全書』の原版を二〇万リーヴルで譲り受けて再版に着手した。そして七二年には、フランス出版史上最大のシリーズとなる『統計的百科全書』の刊行を開始した(一八三二年まで計一九六卷刊行)⁽⁴⁸⁾。

パンクック工房Ecurie Panckouckeに関わった文人、著述家は革命前夜までに総数一四〇名を数え⁽⁴⁹⁾、パンクックはこれらに年金や著作料支払いを行って援助した。ビュッフォン、コンドルセ、ジャーナリストのアルノー Arnaud、アベ・レミー l'abbé Remy、文学者マルモンテル、モリスのシャンフォル Chamfort、のちの革命家ガラ Garat などこの恩恵に与った文人は非常に多い。リール時代からルソーと親交を結び⁽⁵⁰⁾、ヴォルテールともその論敵フレロンとの調停役を買って出てフェルネーに何度となく足を運び、また全集の刊行権を獲得するなど、パンクックの交際範囲は極めて広い⁽⁵¹⁾。こうした書籍業者としてのパンクックが一般的なパンクック像であることは、すでに述べたとおりである。こうしてパンクックは、七二年頃から一転して新聞・雑誌の出版を中心にしたいわゆるジャーナリズムの世界に乗り出すことになる。

2. 『ジュネーヴ誌』Journal de Genève、『ブリュッセル誌』Journal de Bruxelles 創刊

書物史研究者H・J・マルタンも指摘するように、パンクックの活動は明らかにいくつかの段階に分けられる⁽⁵²⁾。七二年まではこれまで見てきたような書籍業者としての活動が中心であったものの、この年から七八年まではジャーナリズムが活動の主たる舞台となった。まず当時のジャーナリズムの状況について簡単に触れておきたい。

一七五〇年代から六〇年代にかけて新聞・雑誌の紙面を賑わせたいわば哲学的、文学的論争は徐々に顧みられなくなり、これに関連した文芸誌、科学誌は生彩を欠き経営不振に陥るものが多くなっていたが、他方、七年戦争やアメリカ独立戦争への動きなどの時事的な出来事や戦争のニュースを報ずる刊行物の普及が目立ち始めていた。⁽⁵³⁾ フランスでこのようにいわゆる政治ニュースを一手に担っていたのは、言うまでもなく前述の『ガゼット』であった。ところが、この『ガゼット』は外務大臣ショワズール Choiseul の下で一七六二年に外務省の管轄となつて、『ガゼット・ド・フランス』 *Gazette de France* と名称変更し様々な改革を施したにもかかわらず（週二刊、購読料値下げ、構成の改編）、十分な成功をおさめることがなく部数も低落していた。⁽⁵⁴⁾ これに代わつてフランスで人気の高かつたのは、報道の迅速性、詳細な説明、低価格などの特徴をもった『アムステルダム・ガゼット』 *Gazette d'Amsterdam*、『ライデン・ガゼット』 *Gazette de Leyde* など外国刊行のガゼット（新聞）であった。⁽⁵⁵⁾ またプロシアのクレーヴで創刊されたばかりの『クーリエ・ド・バ・ラン』 *Courier de Bas-Rhin*（1769-1809）、リュクスアンブール発行の定評ある『クレ・ド・キャピネ』 *Clef de Cabinet des Princes de l'Europe*（別名ジュルナル・ド・ヴェルダン *Journal de Verdun*, 1704-1773）、ベルギーのブイヨン発行の（附表の）⁽⁵⁶⁾『ガゼット・デ・ガゼット』 *Gazette des Gazette*（通称ブイヨンガゼット, 1764-1793）がフランスの多くの読書を獲得し、とりわけ「ジュルナル・ポリティーク」をサブタイトルとした『ブイヨンガゼット』は賦課金の支払いで外務省に認可を取りつけ、関税を免除された雑誌として公然とフランス国内に出回り、「ガゼット」購読者の減少の一因ともなっていた。⁽⁵⁷⁾

パンクックはこのような状況の下で、まず一七七二年七月に通称⁽⁵⁸⁾『ジュネーヴ誌』 *Journal de Genève*（正式名 *Journal historique et politique des principaux événements des différents Cours de l'Europe*、一二折り、旬刊、六〇ページ）を創刊、⁽⁵⁸⁾次いで二年後の一七七四年一〇月には通称⁽⁵⁹⁾『ブリュッセル誌』 *Journal de Bruxelles*（正式名 *Journal de politique et de littérature*、一二折り、旬刊、四八ページ）を創刊し、⁽⁵⁹⁾いずれもいわゆる政治誌の

刊行によってこの分野に先鞭をつけた。『ジュネーヴ誌』はデギヨン公からの特認、『ブリュッセル誌』も当地の許可 *aveu* の下で刊行されたことになっているにもかかわらず、実際の印刷地はいずれもパリであり、フランス政府の承認を得ている。パンクックによって創刊されたこの二誌と競合関係をもったのは、国内誌もさることながら何よりもこれらの外国誌であった。この外国誌に対抗して「国家的なプレス」 *presse nationale* を創るとというのが、言うなればパンクックの刊行意図であって、これはまた当時の定期刊行物の状況に対応するものであった。

当時の国際環境からみて明らかのように、先の六二年の外務省による『ガゼット』統合は、一七世紀以来の国際戦争（とくに七年戦争）でのライバルでジャーナリズムの発達していたイギリスを意識した政策であり、同紙を政府のプロパガンダとして利用し世論操作を図ったものである。かくして政治ニュースの掲載を望む刊行物は外務省すなわち『ガゼット』の許可を求めかつ賦課金を支払わねばならず、『ガゼット』の独占権は一時強化された。しかしながら『ガゼット』は、平板な報道ゆえに結果的には前述のように購読者を減らし、逆に外国誌の一層の台頭を惹き起こしてしまう。こうして政府は、世論を確かなものにするためには『ガゼット』のみに依存するわけにはゆかなくなり、次第に他の刊行物にも目を向けるようになる。『ガゼット』の独占は崩れ、政治ニュースの出版規制が緩和される状況においてこの二誌の創刊が敢行されることになったのである。

パンクックは、政治ニュースを掲載する雑誌の創刊にあたっていくつかの新しい試みを行っている。一つは、両誌とも政治部門 *partie politique* に重点を置き、文学部門 *partie littéraire* を加えたいわば政治誌であったが、重要なのはこの政治誌のタイトルを「ガゼット」ではなく「ジュルナル」にしたことである。すでに述べたように、「ジュルナル」はその嚆矢の『サヴァン誌』を始めとして同時代の代表的ジュルナルの⑤『百科全書新聞』 *Journal encyclopédique* に至るまで、一般的に定期刊行物としては、科学、技芸、文芸の分野に使用されることの多かったタイトルである。パンクックはこのジュルナルに「ポリテイク」 *politique* という形容詞を付与し、「ジュルナル・ポリテイク」 *Journal*

politique というタイトルをこの二つのいずれの雑誌にも適用した。ポリテイクを単純に「政治」と捉えたと誤解をまねくが、『ジュネーヴ誌』の緒言 *prospectus* によれば、ポリテイクとは「公的な出来事の光景を報じ、国際的な外交条約を提示する限りにおいて」ポリテイクであるという。⁽⁶¹⁾『ガゼット』に集められていたようなニュースを「ヌーヴェル・ポリテイク」 *nouvelle politique* と普通呼んでいたのも、外交、時事を中心にしたいわゆる政治ニュースのジュルナルを新たに標榜したと言って差し支えなからう。パンクックは、のちに（一七九二年）刊行した雑誌『アヴィズール・ナショナル』 *Avisur national* の中で、ジュルナル・ポリテイクをフランスで最初に行ったのは自分であると主張するが、⁽⁶²⁾ これまでポリテイクを扱ってきたのが主にガゼットであったことを考慮すれば、この名称は当時としては斬新なものであったと言える。これらの点を厳密にするために、再度、附表「アンシャン・レジーム期のジュルナル一覧」に基づきながら検討してみよう。附表からみたジュルナル・ポリテイク初出の例としては、⁽²⁷⁾ ⁽²⁸⁾ ⁽³²⁾ のように古くはアムステルダム、ベルン、ハーグなど外国で刊行された短命の雑誌があり国内では⁽⁶²⁾ ペズナス発行のものがあること、またパンクックの「ジュルナル・ポリテイク」は競合誌であった⁽⁶⁹⁾ 『ブイヨンガゼット』のサブタイトルの「ジュルナル・ポリテイク」を意識し、いわばこの模倣でもあることを斟酌するとしても、フランス国内刊行の本格的なジュルナル・ポリテイクはタイトルからみればこれが最初といっても過言ではない。むしろこれはフランス最初の「政治雑誌」を直截的に意味するものではない。前述のように、政治 *politique* を扱う雑誌にはプロテスタント系の外国刊行のものを中心に、「メルキュール」 *Mercur* を冠したものが多くあり、またタイトルにポリテイクをもたずとも政治を扱うジュルナルも同じく外国系のものを中心存在したからである（⁽²²⁾ ⁽²⁵⁾ ⁽³⁴⁾ ⁽³⁵⁾ など）。それでは、このジュルナル・ポリテイクでパンクックは何を意図しなかったのだろうか。パンクックが、このジュルナル・ポリテイクに過大な期待を抱いていたことは、のちの八九年の『メルキュール誌』に掲載されたパンクック自身の論文に表出されている。⁽⁶³⁾

「ジュルナル・ポリテイクは、決してガゼットではない。全く異なる性格をもたねばならない。」パンクックによれば、「ガゼット」はいわば「最初の話、瞬間のうわさ、真偽はともかくとして報告などを、評価する暇もなく集めたものである」のに対して、「ジュルナル・ポリテイク」は、「これらの難点を避けることができるものである。」編集者は、語る前に一週間熟考し、報告を比較し、信用の度合を測り、因果関係を示したりして、「ニュース選択の主人」になるものなのである。つまり、ジュルナル・ポリテイクは、ガゼットのような単なる政治ニュースの報道ではなく、ニュースを選択し、評価や検討を加えたものということになる。ジュルナルというタイトルがすでにガゼットのような政治新聞にも使われるようになっていたことは、『百科全書』の記述が示していた。しかし文字通りポリテイクを冠したジュルナル・ポリテイク、すなわちパンクックの言を額面通り信用すれば、政治を評ずるジュルナルへの志向性がここで明確に打ち出されたことになる。

また、新しいジュルナル・ポリテイクは、「例外なしにヨーロッパのあらゆるガゼットの要約、抜粋、縮少になりうる」ものであり、他のヨーロッパの新聞や雑誌から多くの記事を集めるものであることが、当時の『サヴァン誌』に載った紹介記事で主張されている。⁶⁴『サヴァン誌』に代表されるこれまでのジュルナルが多くの書物を集めて書評を行うものであるように、政治のジュルナルとは多くの政治ニュースを集めて評じるものだというわけである。実際に当時のパンクックの書簡には、「イギリス、スウェーデン、デンマーク、ロシア、フランドル、ドイツの新聞の翻訳に多くのものが忙しく携わっている」という証言も残されている（一七七二年四月二五日）⁶⁵。

すでに述べたように「ガゼット」と「ジュルナル」の両語は、つねに曖昧さを残しながらもある程度当時も顕著な差異を有していた。一七六二年の『アカデミー・フランセーズの辞書』の記述においても、「ガゼット」は、「週何回か発行され、さまざまな国のニュースを含む刷り物 *feuille volante*」であるのに対して、「ジュルナル」は、「新刊書の書評のために毎月印刷される著作物 *ouvrage*」である。⁶⁶ 外国刊行のものは別として、少なくともそれまでフランス

国内でポリティークを扱うのは一般的にガゼットに代表されるルーズリーフ式の新聞のような刷り物であったので、数百ページにも及ぶ評論雑誌スタイルのジュルナルとポリティークの接点は原則的には見いだしにくいものであった。換言すれば、絶対王政の特認制度下では、ポリティークに関わる情報 *nouvelle politique* は、当時の検閲基準である反宗教文書、反王権文書、誹謗文書、反良俗文書に抵触する場合が多かったために他の分野の情報よりも規制が厳しく、定期刊行物としては『ガゼット』紙のいわば専管事項とされていた。従ってパンクックのジュルナル・ポリティークはこうしたポリティーク規制の枠を名目的には一步超えたものといえる。パンクックが両誌の名目上の刊行地を外国にしたり、また『ジュネーヴ誌』のタイトルのにおいてはジュルナル・イストリーク *Journal historique* を前面に出すことでポリティークを抑えた表現にしたのも、おそらくはこのような規制への配慮であったと思われる。しかし、パンクック自身は国王印刷物に関わるなど出版業者として権力に接近しつつ、六四年には『サヴァン誌』の特認を名目上獲得し（六六年に譲渡）、このような新しいタイプのジュルナルを創刊する資格を有していた。また外務大臣ショワズール以来、イギリスに対抗して『ガゼット』を中心にしたプロ・パガンダ活動を展開した政府も、前述のような事情もあって新たにポリティークを扱う定期刊行物の登場を認めざるをえなかったと推測される。

次にパンクックの試みとして注目されるのは、多彩な編集者の任用である。一七七五年に『ブリュッセル誌』の編集者 *editeur* に採用されたのは、弁護士 *S・N・H・ランゲ Linguet* (1736-94) である。のちの『バスチーユ回想』 *Mémoires sur la Bastille* (一七八三年) の著者として有名なランゲは、当時ラ・アルプ *La Harpe* のアカデミー会員入り（一七六六年）を批判するなど反フィロゾーフの態度を鮮明にし、戦闘的、扇動的な人物として知られていた。⁽⁸⁷⁾ パンクックがランゲに一万リーヴルという破格の供託金を与えて編集を任せたのは、フィロゾーフに好意的であった P・ルソーの『百科全書新聞』に対抗させるためでもあった。翌年ランゲが時の実質上の首相でもあったモールパ *Maurepas* によって追放されると、今度はその文学部門の編集長に、ランゲが批判してやまなかったラ・アルプが登

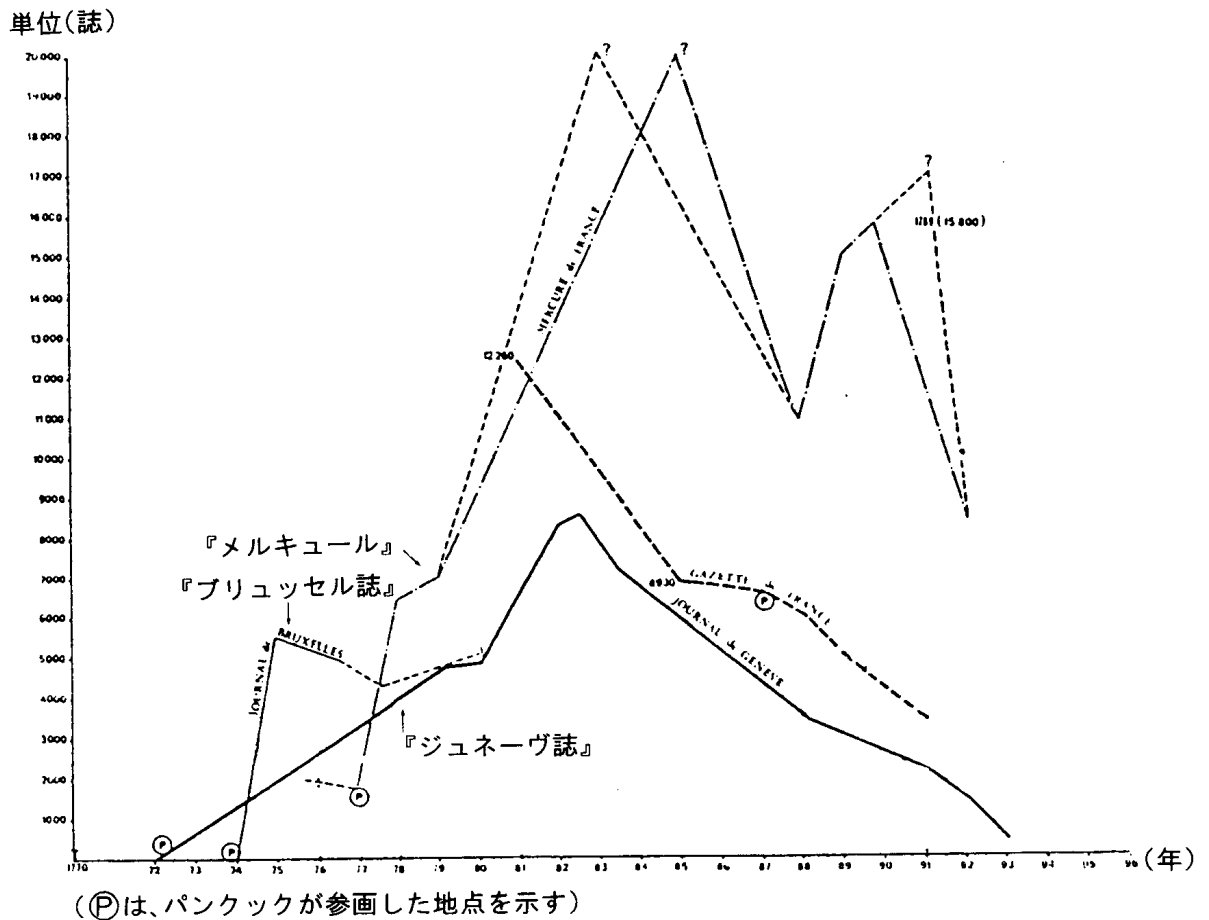
用される。一方、先の『ジュネーヴ誌』においても、パンクックは七八年から実際の管理業務を他に任せて検閲や編集者の選抜に専念し、八四年にスイス人ジャーナリストのマレ・デュパン Mallet du Pan (1747-1800) を招聘した。⁽⁶⁸⁾ デュ・パンは、ランゲが逃亡先のロンドンで発行した雑誌『アナール・ポリティーク』*Annales politiques, civiles et littéraires* の協力者であつて、ランゲ帰国後もこの地で編集者として活躍してはいたが、フランスではまだ無名のジャーナリストであつた。パンクックによるこれら異色の編集者の登用は、パンクックが編集者の信条やイデオロギーよりもむしろその手腕、才覚、話題性に選択の主眼を置いていたことを物語っている。⁽⁶⁹⁾ 実際に両誌の記事を分析したチュコーシヤラの指摘に従えば、ランゲは以前の退屈で冷淡な紙面（編集長デュボワ・フォントネルの時期）を刷新し、数多くの情報源からのニュースを掲載して記事の多様化に努め、生き生きと情熱的なものにした。⁽⁷⁰⁾ またマレ・デュパンは、フランス国内のニュースを拡大し（一割から七分の一程度に）、外国のニュースに一種の批評を加え、とくにヨーロッパ諸国とアメリカとの関係には多くの記事を割き、読者の要望に応えた。

こうしたパンクックの新しい試みが現実にいかに奏功したのか、この二誌の普及の問題に触れる必要がある。『ジュネーヴ誌』は旬刊誌（七八年に週刊）として購読料一ハリーヴル（七八年に二ハリーヴル）で出発し、『ブリュッセル誌』も同様の体裁であつた。第六表は、パンクックの発行した新聞・雑誌の部数を示したグラフである。⁽⁷¹⁾ 『ジュネーヴ誌』は当初伸び悩んだものの一七七八年頃から飛躍期に入つて増加し（四八〇〇部）、八二、八三年頃に八五五〇部まで到達した。ところが、『ブリュッセル誌』は創刊当初に四〇〇〇部から六〇〇〇部に増加した後、下落した。『ブリュッセル誌』の下降期はランゲの解任期と重なっており、ブリソーの次の証言を聞けばランゲの存在の大きさが推察されよう。「ラ・アルプやシュアール Suard よりも紙面に才気と機知をきかせたランゲ。いまのジュルナルは、乾き、冷たく、重く、購読者を退屈させて死なせた後に、自らも衰弱して死ぬだろう。」⁽⁷²⁾ かくして一七七七年頃、後発の『ブリュッセル誌』の経営状態が悪化し、『百科全書新聞』や『ガゼット・デ・ガゼット』などの外国紙がフランス国内へ

の流入のたにに対策を講じたことや、国内では七七年にパリソーらによつて⑨『ジュナル・フランセ』 *Journal Français* が創刊されたこともあつて、パンクツクのこの試みも当初は、難航したように思われる。そこで翌年パンクツクは次の改革に着手することになったのである。

3、『メルキュール』 *Mercur de France* 改革

パンクツクが手懸けた三番目の改革は、『メルキュール』改革であつた。前述のように『メルキュール』誌は、文芸誌として独占的な地位を保持し続けてきた雑誌でありながらも、一七六〇年代頃から読者数の停滞（一七六三年—一六〇〇名、一七六四年—一七七八名）などをうけて経営危機に陥り、七八年五月に四〇〇〇リーヴルの負債を抱えてついに破産の請願を行った。⁽⁷³⁾ 一七七七年に登場したフラ



第六表 パンクツクのジュルナルの部数(1770—94年)

(S. Tucoo - Chala, *Panckoucke.*, p. 243.)

ンス最初の日刊誌③『ジュルナル・ド・パリ』*Journal de Paris*が、政治ニュースを原則として掲載しないにもかかわらず日々の出来事を詳細に報じ、文学、法律、商業、見せ物情報を掲載することで多くの読者を獲得したことも『メルキュール』不振の原因であった。

パンクックは、営業財産（ビュツフオンの『博物誌』、アカデミー記録）の売却によってこの『メルキュール』の獲得に成功し、一連の改革を実行することになる。

まずパンクックが着手したのは『メルキュール』の財政問題である。『メルキュール』は公的な雑誌として編集に関わる文人達に多額の年金 *pension* を与えており、この年金と政府に支払う賦課金問題が急務であった。⁽¹⁴⁾ 七八年六月一二日に結ばれた公証人証書 *acte notarié* によると、パンクックはこの年金について、一〇〇〇リーヴル以下の年金を廃止、以上の年金に対しては三分の二を削減、また三分の一は『メルキュール』に貢献する文学者に内務省 *Ministre de Paris* から配分するなど、この制度を『メルキュール』の財政事情に合致させるものとした（四条）。また賦課金も部数七〇〇部までは二万リーヴルと定め、現状で八五〇〇リーヴルの削減に成功している（五条及び六条）。⁽¹⁵⁾

次いでパンクックは、『メルキュール』の紙面、内容の大幅な改革を断行した。『メルキュール』は伝統的に文芸誌であったので、Ⅰ、雑報 *Pièces fugitives*、Ⅱ、文芸情報 *Nouvelles littéraires*、Ⅲ、科学と文学 *Sciences et Belles-lettres*、Ⅳ、美術 *Beaux Arts*、Ⅴ、見せ物 *Spectacles* のように文芸情報中心の五部の紙面構成をとり、六番目の記事として年四回のみ「ヌーヴェル・ポリテイク（政治ニュース）」*nouvelles politiques* を掲載していた。⁽¹⁶⁾ パンクックの改革の眼目は、この「ヌーヴェル・ポリテイク」を「ジュルナル・ポリテイク」にタイトル変更し政治面の記事を充実させることで『メルキュール』の政治雑誌化（半文芸・半政治）を図ることであった。第一回は、このパンクックの方針に基づいて出版された新しい『メルキュール』（二七七八年六月号）である。一見するとわかるように表紙のジュルナル・ポリテイクの強調や、目次におけるジュルナル・ポリテイクの充実などいずれも従来の紙面

にはなかつた新しい試みである。

この『メルキユール』における「ジュルナル・ポリテイク」は、現実には先の経営危機に頻していた『ブリュッセル誌』の政治部門の記事を『メルキユール』に廃・統合することで実現したものであったが、従来のヌーヴェル・ポリテイクは『ガゼット』の抜粋しか含まず、新しさという魅力をもたなかったのに対して、このジュルナル・ポリテイクは「ブリュッセル誌」と同様に、正確、詳細、忠実に、外国のガゼットが含む重要で興味深いことを要約するものであると、この欄の趣旨説明では主張されている。パンクックのジュルナル・ポリテイクに対する思い入れは、こうして『メルキユール』

MERCURE DE FRANCE, DÉDIÉ AU ROI.

PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES,

CONTENANT

Le Journal Politique des principaux événements de toutes les Cours ; les Pièces fugitives nouvelles en vers & en prose ; l'Annonce & l'Analyse des Ouvrages nouveaux ; les Inventions & Découvertes dans les Sciences & les Arts ; les Spectacles ; les Causes célèbres ; les Académies de Paris & des Provinces ; la Notice des Édits, Arrêts ; les Avis particuliers, &c. &c.

JUIN 1778.



A PARIS,

Chez PANCROUCKE, Hôtel de Thou,
rue des Poitevins.

Avec Approbation & Brevet du Roi.

TABLE.

Avis, pag. 3	La Hollande & l'Anticof-	
PIÈCES FUGITIVES.	mopolite,	54
Lettre à M. de Voltaire,	7	Le Turtuffe épistol. &c. 53
Réponse,	8	Loix constitutives des Etats
Disiugue mêlé de Vaude-		de l'Amérique-Sept. 56
villes,	10	Encyclopédie poétique, 57
La visite de Zélis,	15	ANNONCES LITTÉR.
Dialogue traduit de l'An-		ACADÉMIES. Arras, 62
glois,	16	SPECTACLES, 63
Notice sur M. le Duc de la		CAUSE CÉLÈBRE, 66
Rochefoucauld.	20	ARTS. Gravure, Musique,
L'heureux Ecolier, Conte,		70
27	Anecdotes,	71
Enigme, Logogryphe, 28-29	JOURNAL POLITIQUE.	
Chanson,	30	Constantinople, 73
NOUVELLES LITTÉ-		Petersbourg, 75
RAIRES.		Copenhague, 76
Les Œuvres de Sénèque le		Stockholm, 77
Philosophe,	35	Varsovie, 78
Régens de S. M. Imp.		Vienne, 81
Catherine II,	36	Hambourg, 83
Annales poétiques,	37	Londres, 89
Mémoire sur différens flu-		Etats-Unis de l'Amérique-
des aërisiformes, &c. 42		Septentrionale, 101
Le Génie de Pétrarque,	43	Paris, 111
Géographie naturelle &c. 53		Bruxelles, 118

APPROBATION.

J'ai lu, par ordre de Monseigneur le Garde des Sceaux, le *Mercure de France*, pour le mois de Juin. Je n'y ai rien trouvé qui puisse empêcher l'impression. A Paris, ce 24 Juin 1778.

DE SANCY.

De l'Imprimerie de MICHEL LAMBERT,
rue de la Harpe, près Saint-Côme.

第一図 『メルキユール』誌1778年6月号（下線が Journal politique）

改革に一層明瞭に反映した。

このことはパンクックの次のような証言でも裏付けられる。「私はメルキュールを国家 Nation 第一のジュルナルにする確信をもっており、これをうまく実行するためであれば何もうとわかない。十日毎に出される政治部門は非常に刺激的なものになり、これだけがジュルナルの成功を決める。他のジュルナルよりジュルナル・ポリティークは十倍売れるのだ。」⁽⁷⁷⁾

実際の紙面においても、ジュルナル、ポリティークの比重は拡大した。近年の S・メナンの紙面分析によると、改革前の五月号の紙面ではヌーヴェル・ポリティークは、九ページ（全体二一六ページ）しか占めていないのに対し、新しい六月号のジュルナル・ポリティークは四八ページ（全体一二〇ページ）を占め、かつより小さな活字で印刷されている。詩などを中心にした文学部門が従来の重要性を失い、明らかに政治部門に重点が移っていった。⁽⁷⁸⁾

一方、パンクックはこの『メルキュール』においても斬新な編集チームを組織した。再度表紙を検討してみると、表題における国王への献辞はこれまでの踏襲であるとしても、次の「文学者の団体（社会）による」Par Une Société de Gens de Lettres という提示は『百科全書』にも見られるように新しく、加えて、「緒言」Avertissement にはこのメルキュール誌の主たる編集者が紹介されており、数多くの文人を糾合一つのソシエテを構成しようとするパンクックの意図が推察される。従来の伝統的な『メルキュール』は、いわば「文学の愛好家」amateurs des lettres の作品、著述を集める傾向をもっていたのに対し、新しい『メルキュール』には専門的で著名な文人が徴募された。⁽⁷⁹⁾ 政治部門には、『ブリュッセル誌』の編集者でもあったデュ・ボワ・フォンタネル、文学部門では前述のラ・アルプ、詩人や劇作家として著名なベルケン Berquin、ビュッフォンの『博物誌』の編集者で自然科学者のドーベントン Daubenton、重農主義経済学者ラベ・ボドー l'abbé Baudouin、アカデミシヤンのシユアール、そしてダランベール、コンドルセ、マルモンテルも協力を約束して編集に参画することとなっている。パンクックはこれらさまざまな分野に傑出した文

人達の組織者、監督者の役割を果たそうというのである。

この新しい『メルキュール』は、刊行当初から大きく部数を伸張させていった。既出の第六表に依拠しながらこの点を検討してゆきたい。改革が行われる直前の一七七八年五月における『メルキュール』の部数は約二〇〇〇部（一七六四名）であった。これは当代の他の新聞・雑誌からみれば多いとはいえ、『ジュネーヴ誌』や『ブリュッセル誌』の半分程度しかなかった。しかし『ブリュッセル誌』を統合したこともあって七月には六五〇〇部に達し、その後もわずかながら増加し続けた。増加傾向が顕著に上向きになったのは七九年からで、八三年（もしくは八五年）には二万部に到達したとみられている。八八年からの編集者であるJ・プーシェはこの増加をマレ・デュ・パンの手腕と結び付けて論じているものの（よって八五年ピーク説）、これはやはりアメリカ戦争の影響を多分にみるのが妥当であろう。⁽⁸¹⁾『メルキュール』がフランス第一の部数を誇るようになったのはおそらくこの時期であり、単独の新聞・雑誌としてこれを凌駕するものは一八世紀中には出ない。これ以降の部数は低落するが、しかしながら、革命前夜においても『メルキュール』はフランス全ての新聞・雑誌の中で最大の部数を保持し続けていたのである。

4、『ガゼット』 Gazette de France 改革

パンクックが革命前において、最後に手懸けたのは『ガゼット』改革であった。前述のように『ガゼット』は一七六二年に外務省の管轄となり、「国家管理」Régie 期（六二―六八年、七一―八六年）と、「依託契約」Ferne 期（六八―七一年）を交互に経験しながらも公的な地位を守っていた。⁽⁸²⁾しかし、購読者の減少に見られる『ガゼット』の衰退は如何ともしがたく、アメリカ戦争時に一時回復したものの（一七八一年―一万二二六〇部）、戦争後は六〇〇〇部程度（一七八五年―六九三〇部）にまで減少し、経営危機に直面していた。パンクックが賃貸契約 bail によってこの特認を所有したのは八六年末のことであった。

『ガゼット』は政治情報を扱う性格上、他のいかなる新聞・雑誌よりも公的な制約が強く、これはパンクックの下

でも同様である。『ガゼット』の記事は事前に外務省の役人によって厳しい点検、訂正をうけたのちに同じ日に宮廷に送られ、他の諸大臣の点検をへて翌日に戻されてから、パンクックが「総監督」*directeur* または「特認管理者」*conservateur des droits et privilèges de Gazette de France* として校正刷りの完成を監督した。⁽⁸³⁾ 他方パンクックは、『ガゼット』傘下の三つの新聞（『パリ小アフィッシュ』*Petites Affiches*、『地方アフィッシュ』*Affiches des provinces*、地方版『アフィッシュ』*Affiches, annonces, et avis divers pour les provinces*）ばかりではなく、全ての政治情報（紙）を監督し、賦課金を徴収する権利を有することにもなった。

ところが、八七年一月からパンクックの下で刊行された新しい『ガゼット』には現実には殆ど変化が見られなかった。すでに「緒言」*avertissement* において、「提案された新しい取り決めでは、『ガゼット』の計画、形態、価格において何の変更する構想をも持っていない。一六三二年の信憑性、真実性という性格を保ち続ける。これはいつも決定的な長所であるし、創始以来逸脱しなかったことである……」と『ガゼット』の不変性が主張されていたが、ページ二欄に組換えられ、一部新しい欄を設けた以外は、週二刊（火・金曜）や購読料一五リーヴルのいずれも以前と同じであった。⁽⁸⁴⁾ 記事内容についても同様である。世界の各地からのニュースを簡潔に（二—一〇行程度）、補足説明や批評もなく単々と報道するというのが、いわば『ガゼット』式報道の一つの特徴であって、新しい『ガゼット』の八七年一月号においても八ヶ国（スウェーデン、ポーランド、スペイン、……）、一五ヶ所からのニュースが、ロシア・トルコ戦争の勃発を伝える記事を皮切りに羅列的に掲載されているだけである。⁽⁸⁵⁾ 同じ十一月の『ブリュッセル誌』すなわち『メルキュール』の「ジュルナル・ポリティーク」と比較検討したチュコーシヤラによると、『ガゼット』も『ブリュッセル誌』も、ニュース項目、発信地、日付はほぼ同様でありながらも発刊日と特認を考慮すれば、『ガゼット』が初発性をもつことは確実であるという。しかし『ガゼット』のニュースが断片的であるのに、『ブリュッセル誌』では、その同じニュースが詳細になり否定や弁明がなされたり、特定の問題に焦点があてられ、時には編集者の個人

的な批評が（署名入りで）つけられることもあった。⁽⁸⁶⁾ 結局『ガゼット』の報道自体には何ら変化は見られず、『ガゼット』は「ヌーヴェル・ポリテイク」のままでありつづけたのである。

このような事情で『ガゼット』の購読者数は衰退の一途を辿った。八七年末には六〇〇〇部に減少し、八九年初めまでにはまた一〇〇〇部失い、革命前夜には四〇〇〇部に落ち込むことになる（第七表参照）。パンクックが所有者になったにもかかわらず、『ガゼット』には顕著な改革は実施されなかったように思われる。これについては『ガゼット』の公的な性格ゆえの制約、政府（外務省）からの規制などの外的条件が想定されるとしても、「時間がなかった」というパンクックの弁解を含めて、パンクック自身の改革への意欲も併せて考慮しなければならない。⁽⁸⁷⁾ すでに論じてきたように、パンクックは「ガゼット」よりも「ジュルナル」形式のニュース報道に大きな期待を抱いていた。『ガゼット』所有は、新聞・雑誌界を独占統制するという意味でパンクックに大きな意義を与えたが、ジャーナリズム改革にとつては制約の大きすぎる対象であった。H-J・マルタンらが指摘するように、パンクックの目的は「一つの国家的なプレス」を創りあげることであり、これに最も適合するのは『ガゼット』ではなく、おそらくはジュルナル・ポリテイクを掲載した『メルキュール』であった。⁽⁸⁸⁾ 『ガゼット』はもはやパンクックの真摯な改革の対象にはなりえなかったのである。

三、パンクックのジュルナル市場支配

パンクックはこのような経過によって、フランスの誇る三大紙（誌）である『ガゼット』紙、『メルキュール』誌、『サヴァン誌』の獲得、保有に成功し、『メルキュール』を頂点にしたジュルナル市場の独占化を進めた。本章では、再度この過程を振り返りつつ、パンクックの市場戦略、市場支配のあり方について検討を加えてゆきたい。

1、パンクックの戦略

前述のように、一般的に定期刊行物を出版しようとする場合、法的には書籍と同様に政府の「特認」が必要とされた。この特認制度は、一七二三年の「出版法典」*Code de la librairie*によって綿密に定義されて以来（二六章、一二三項）たびたび改正されながらも（一七四四年、五七年、六四年、六七年、七七年）⁽⁸⁸⁾、書籍よりも定期刊行物の方に対して、より効果的であったといわれる。定期刊行物は、基本的に予約購読制度 *abonnement* に依存し、王国郵便制度を利用したために、刊行者と購読者双方の名前と所在の確認が可能で、規制が容易であったからである。⁽⁹⁰⁾ また、定期刊行物の出版者は、掲載する全ての記事について事前の検閲を求めねばならず、こうした検閲システムも大きな障害となった。実際にこの手続きを踏まずに刊行することは可能だが、すぐに当局から中止命令が下され、附表にみられるような短命なケースとなった。

パンクックのジャーナリズム活動はこの絶対王政期の出版許可や検閲制度に反抗するのではなく、むしろこれを最大限に利用しようとしたことに一つの特徴がある。確かに、パンクックとこうした権力との関係は当初から良好であったわけではない。出版監督官マルゼルブの時代（一七五〇年—六三年）にも、研究者G・B・ワッツが言及した『クリエ・ド・コメルス』誌 *Courier de commerce* をめぐる外務大臣ショワズールとの軋轢や、⁽⁹¹⁾ 六三年三月のヴォルテール著作集をめぐる事件などたびたび当局と紛争を起こし、六四年に国王印刷局の書籍業者になってからも六九年には大法官モーブーから『百科全書』再版の刊行を差し止められるなど、パンクックは権力側との調停に苦慮した。⁽⁹²⁾ しかし、一七七〇年頃からこうした権力との関係に改善が図られるようになる。⁽⁹³⁾ 寄付金、贈物、献辞、奉仕活動などを通じたパンクックの権力への働きかけも活発になり、外務省、出版監督官、警察代理官 *lieutenant de police* との結び付きが緊密なものになっていった。例えば六七年に、ヴォルテールはジュネーヴの書籍業者クラメール宛の書簡において、「サルティエヌ氏（当時は警察代理官、一七六三年からマルゼルブの後任の出版監督官）は友人のパンクックを大いに厚遇している」と証言しているが、七二年にパンクックは同じクラメールに対して、サルティエヌへの献金を

要求している。⁽⁹⁴⁾ また、パンクックは『百科全書』再版のために、二万リーヴルを寄付金 *gratification* に割いたといわれる。七五年には警察代理人 P・ルノワールの保護を受けて、『ヴォルテール著作集』の国内持込みを認めさせた。一七七七年以後、ヴォルテールからパンクックのトゥー館宛に送られた書物には「ヴェルジェンヌ閣下(当時外務大臣)の封筒」が使用され *sous l'enveloppe de Monsieur Vergennes*、その後一七九〇年に外国からパンクックに送られた書簡には「モンモラン伯(当時外務大臣)気付」 *sous le couvert de Monsieur le Comte de Montmorin* と記載されていた、などパンクックと権力との結び付きを示す事例は多い。⁽⁹⁵⁾

『ジュネーヴ誌』、『ブリュッセル誌』の創刊で新聞界に乗り出すことによって、パンクックと権力側とのこうした関係は一層緊密になった。前述のように二誌とも表面は外国との特認となっているものの、いずれもフランス政府(外務省)の認可申請を経て実際はパリで刊行されたものである。さらに一七七八年の『メルキユール』誌改革も外務省の意向に沿ったものであることは、五月二八日の外相ヴェルジェンヌからパンクック宛に送られた次のような書簡で明白である。「今月二七日の貴殿の手紙を受け取りました。ブリュッセル誌をメルキユール誌に統合しようとするあなたの計画をアムロ氏やルノワール氏が承認するならば、私の側からも喜んで公衆にとって快適で有益になりうるこの取り決めに認可 *approbation* を与えましょう。」⁽⁹⁶⁾

パンクックはこの時にまた、「ジュルナル・ポリティークの独占的特認」 *le privilège exclusif et les brevets des journaux politiques* という名目の重要な特認を獲得することに成功している。⁽⁹⁷⁾ これは二〇年の期限付きで外務省(ヴェルジェンヌ)からパンクックに認められた、政治ニュース掲載の独占権である。これによってジュルナル・ポリティークの特認自体は外務省からパンクックの手に移ることになり、パンクックは国家の監督の下でこの独占を行使し、国内に流布する内外の政治紙(誌)から賦課金を徴収するというシステムを構築する。これは契約 *bail* による使用収益権 *usufruit* として一定期間承認される権利であったが、八七年の『ガゼット』の特認の獲得によって、その独占権は

ますます堅固なものになった。

他方、特認と同様に権力との関係で重要なものに検閲の問題があった。検閲はアンシクロペディストの活動が行われた一七五〇年代や六〇年代に定期刊行物の分野においても多くの事件や紛争を惹起したが、七〇年代からはむしろ緩和される傾向にあった。確かに一七七〇年代初めのモーブー期のようにジャーナリズムにとって灰色の時代もあったし、⁽⁹⁸⁾一七七六年（ランゲ事件など）やアメリカ戦争期など一時的に規制が強化された時期もあったものの、八三年以降は再び緩和されている。新『メルキュール』誌に代表されるパンクックの紙面改革は、この検閲の変化にみられる権力側の対応と無関係ではない。すなわち、『ブリュッセル誌』の統合という形式で行われた『メルキュール』のヌーヴェル・ポリティークからジュルナル・ポリティークへの変更は、形式的には「ニュースのプレス」*presse des nouvelles* から「オピニオンのプレス」*presse d'opinion* ⁽⁹⁹⁾へのパンクックの模索を示唆するものであり、これはひいては権力側の模索でもあったと考えられる。

その他にもパンクックは、ジュルナル市場の独占と商業化のためさまざまな方法を試みた。一つは、二次的な国内の競合誌の吸収と統合である。たとえば、一七七四年の『ブリュッセル誌』創刊の折りには二誌〔*Avant Coureur* (1773), *Gazette des Sciences et des Arts* (1774)〕七八年の『メルキュール』の折りにも四誌〔⁽⁹⁶⁾*Journal français* (1778), ⁽⁹⁸⁾*Journal des dames* (1777), ⁽⁹⁸⁾*Journal des spectacles* (1777), ⁽⁹⁶⁾*Journal de Bruxelles* (1778)〕の吸収や廃・統合を断行した。また外国誌に対しても、七九年にはヌーシャテルの⁽⁹³⁾『ジュルナル・エルヴェティーク』*Journal helvétique*、八一年には有名な『文芸年報』*Année littéraire*の獲得にも尽力したがこれはいずれも失敗した。結局七八年から八六年の八年間でパンクックは一六誌の廃・統合を画策した。外国誌の排除がパンクックの念頭にあったことはすでに述べたが、パンクックは外国誌の国内への流入禁止と賦課金値上げを当局に要請することによってこれに対処した。七三年の『百科新聞』の差押えや、七四年のレンヌでおきた『ガゼット・デ・ガゼット』の焚書事件

など外国誌を取り巻く状況は悪化した⁹⁰が、この二誌が再び国内で配布する権利を得た時、パンクックは賦課金の値上げに奔走し、現実には『ガゼット・デ・ガゼット』には三〇〇〇リーヴルの値上げとなった⁹¹。

パンクックはまた経費節減のためさまざまな試みを行った。

右の新聞・雑誌の統合も一面では運営費の節約をねらったものであり、その他、版型の縮小（四つ折りから一二折りへ）、製版数の削減、紙質の引き下げなどの方策を構じた⁹²。第七表は、当時の代表的な新聞・雑誌の購読料である。パンクックが尽力した『ジュネーヴ』、『ブリュッセル』、『メルキュール』の購読料がとくに安価であったわけではないとしても、分量や定期性からみれば『外事新聞』*Gazettes étrangers* や『ガ

ゼット』よりは読者にとって有益に映ったであろう。さらにパンクックはとくに地方の購読者の獲得に努めたといわれている。この時期の購読システムは、パリはパンクックの事務局が一括して担当し、地方は地方書籍業者が通信員 *correspondants* として依託販売するという形態になっていたが、パンクックは、事務局の係員 *commis* や外交員 *commis voyageur* を直接派遣したり、奨励金（一部につき三—五リーヴル）を与えたり、値引き *au rabais* 販売するなどして読者の拡大を図った⁹³。購読の実態を把握するのは史料の制約からみて困難であるが、一七七八年に『メルキュール』誌から外務省に送られた報告によると、購読者の内訳は、パリ三六・三%、地方五三・八%、外国八・二%、小売り一・七%となっており、地方購読者の多さを物語っている⁹⁴。またヴェルサイユの宮廷には、言うまでもなく毎号が寄

（単位 L：リーヴル，s：スー）

Genève	1772-1773 18L (10 日)
	1773-1792 21L (週)
Bruxelles	1775-1778 18L
Mercure	1778-1789 30L パリ
	32L 地方
Gazette	1785-1789 15L
Journal général de	30L パリ
la France	37L 地方
Les Gazettes étrangères	36L ハーグ
	48L アムステルダム
Année littéraire	24L パリ
	32L 地方
Journal de Paris	24L パリ
	31L 4s 地方

第七表 当時の新聞・雑誌の価格

(S.Tucoc - Chala, *Panckoucke*., p.237.)

贈、配布され、一七八二年の記録では『ジュネーヴ誌』八三〇〇部のうち五〇部はこうした寄贈に、一五〇部は書籍業者への奨励品として使用されたという¹⁰⁴

編集者の徴募の方法もすでに述べたようにパンクック独自の戦略があった。パンクックに用いられたジャーナリストは必ずしも一方向の特定の理念やイデオロギーに偏ってはいなかった。青年時代の精神面から見ればヴォルテリアンだったパンクックが、反対派のランゲを採用し、君主政主義者のシャンフォール、さらにはコンドルセをも雇い入れたことがその一つの証左となる¹⁰⁵。パンクックは権力と著者の仲介役 *intermédiaire*、調停役を果し、結果的にさまざまな思想傾向をもつ著者、文人の育成を促進した¹⁰⁶。一般にパンクックのジュルナルは革命のジュルナルでもなければ、君主政主義者のジュルナルでもないといわれる所以である。パンクックの目的は、こうしたイデオロギーを説き守るというよりも、知識や情報を詳細にできるだけ多くの読者に伝えること、そしてさらに言うならば、多く売ることとに置かれていたように思われる。パンクックが外国誌排除のためにとった対策は、パンクックがリールの青年期以来傾倒していた啓蒙思想の御用新聞である『百科全書新聞』（リール）を排撃し、友人でもあったP・ルソーを窮地に追い込むという皮肉な結果になったのもこうした商業戦略のためである。

2、パンクックの市場支配

パンクックは、このようなさまざまな戦略によってジュルナル市場の支配を目論んだ。一七七二年―一七七八年は、『ジュネーヴ誌』と『ブリュッセル誌』の創刊によるいわば出発期にあたるが、この時期の末には、パンクックのジュルナルの購読者は一万五〇〇名（一万二〇〇〇部）¹⁰⁷を数え、その後『メルキュール』の急増もあって一七八三年中に二万三〇〇〇名に達している（第六表参照のこと）。他のフランス語誌との比較は難しいけれども、研究者E・アタシが示した同時期の人気誌『クーリエ・ド・リヨロップ』の五〇〇〇名に比べれば圧倒的に多い¹⁰⁸。その後ヴェルサイ

ユ条約の締結もあって（一七八三年九月）急激な減少が見られたとしても、改革への動きの中で出版の自由が容認されたといわれる一七八八年頃に『メルキュール』は増加に転じ、新たに保有した『ガゼット』を加えて、八八年末には、二万三千名の購読者がいたと推定されている。

最後に、パンクックのジュルナルの経営実態について触れておきたい。一般的に言ってパンクック以前においては、一書籍業者が一つの新聞や雑誌に財政的な援助を与えることはあっても、所有者になることは非常に稀有であり、またその経営自体が必ずしも利益のあがる性格のもではなかった。しかしパンクックの場合は明らかに状況は異なっている。第八表は、パンクックのジュルナル

第八表 パンクックのジュルナルの収支決算

Journal de Bruxelles (1776年) (*Ibid.*, p. 246-250より作成)

(単位 L : リーヴル)

購読料収入	Recettes abonnements	4400 x 18.	79200 L
支出	Dépenses		
賦課金	redevances	22000 L	
編集・管理	redaction - gestion	38000 L	
			60000 L
利益	Bénéfice		192000 L

Mercure de France

(1779年)

(1785年)

購読料収入	700 x 28	196000 L	20000 x 28	560000 L
支出				
賦課金	20000 L		280000 L	
編集・管理	88000 L		80500 L	
		108000 L		360500 L
利益		88000 L		199500 L

Journal d'Avignon (1776年) (A.-J. Parès)

収入	42436 L
支出	41923 L
利益	513 L

と他紙『ジュルナル・ダヴィニョン』の収支決算である。⁽⁹⁾ 収入は購読料が主であり、支出は政府に納める「特認」の賦課金と、編集費（植字 composition, 印刷 tirage, 折り pilage など）や管理費（人権費、年金など）から成り立っていた。試算によると、表のように『メルキュール』誌が最大の利益を上げ、一七八五年においては二万名の購読者で二万リーヴル近くの利益があった。結局一七七二年から一七七八年にかけて、パンクックは自分の経営するジュルナルによって年平均二〇万八三九〇リーヴルの利益を獲得していたことになる。

六〇年代初頭から革命前夜に至るジャーナリストとしての歩みは、パンクックにまさに「文学のチュルカレ」さながらの権力、財力と地位を与えた。パンクックはこうして名実ともに「最初のジュルナル帝国」le premier empire journalistique の支配体制を確立していたのである。⁽¹⁰⁾

おわりに

革命の勃発と共に実質的な出版の自由が確保されて、パンクックの独占的なジュルナル市場の支配は終結した。と同時にすでに述べたようなブリソーやデムーランらによって、「文学のチュルカレ」パンクックに対する痛烈な批判が表面化し始める。いよいよ下僕フロンタンの時代の到来というわけである。それに対して革命期になるとパンクックも、自ら『メルキュール』などに論稿を署名入りで掲載して論戦を展開しようとする。これ以前は、殆どパンクックの執筆した記事や論文はなく、ジャーナリズム活動といってもいわば裏舞台の商業活動が中心であったのだが、革命勃発後のパンクックは逆に積極的に論争に参画しようとした。先の「ジュルナル・ポリティーク」に関わるパンクックの陳述は、この時期のものである。また新聞・雑誌の刊行も継続させ、八九年十一月に『モニトゥール』紙、九〇年六月に『ガゼッタン』紙 Gazetfin、九二年一二月に『アヴィズール・ナショナル』紙など新しい刊行物を創刊している。これらの状況については、すでに本稿で定めた時期の枠を越えているので稿を改めて論じたいと思う。

本稿は、シャルル・ジョゼフ・パンクックというジャーナリストの活動を通して、一七七〇年代、八〇年代のフランスにおける新聞・雑誌の状況を論じた。とくにリヨングループの共同研究から得られた一八世紀フランスにおける「ジュルナル」の隆盛と、パンクックという個人レベルにおける「ジュルナル・ポリティーク」の主張との接合を試みたが、おおまかながら次のことを確認できたのではないかと思う。

まず、新聞・雑誌による情報、知識、思想の商業化の問題である。すでに一七三〇年代頃から、新聞・雑誌の多様化や専門化の傾向は始まっていたが、本稿の扱った一七七〇年代、八〇年代における量的拡大によって一層商業化が進んだと考えられる。二万部程度の部数は必ずしも一九世紀的な大衆ジャーナリズムの到来を意味するものでないとしても、従来一般的に考えられている以上に革命前夜の段階で新聞・雑誌は出回っていた。パンクックはこうした時代の立て役者として、いわば「思想の商人」*marchand d'idées*（ブリソーの命名）の役割を果たした。¹¹近年のジャーナリズム研究者H・ゴフが指摘するように、「プラグマティスト」¹²パンクックの試みた商業戦略はある程度時代を先取りする側面をもっており、従って新聞・雑誌業も従来の細々とした家内工業的営みから脱しつつあったと考えられる。

また、パンクックの「ジュルナル・ポリティーク」の理念は、一種の政治評論誌への試みとして重要である。フランスの新聞・雑誌の動向を論じたE・アイゼンスタインの近著におけるように、これをパンクックの個人的志向の問題として矮小化し理解することも出来るが、特認の付与に見られるように政府の意向に沿ったものであることも考慮しなければならない。¹³当時の政治背景を念頭におけば、政府側の情報対策面における意識の変化をも読み取っているのではなからうか。ただこれはあくまで形式上の問題であって、記事内容自体が真に評論の名に値していたかどうかは別問題である。革命の知的起源を研究したD・モルネは、当時の新聞をこう評していた。「大新聞は、もはや、一定の証言しか提供しなくなる。一定の証言とは、ごく普通のひとの意識のなかに浸透した哲学的思想とか、大胆でもなく危険も伴わない議論とかについての証言である」。¹⁴パンクックのジュルナル・ポリティークにもこうした配慮は当然

なされたに相違ないが、にもかかわらずこの模索をより肯定的に意義づける必要がある。いずれにしても、その度合は本稿でなし得なかった詳細な記事分析によって測られる必要がある。

さらに「ジュルナル」の隆盛について、本稿では数量分析に基づいた分析を提示した。従来より、アンシャン・レジーム期の新聞・雑誌に比較的「ジュルナル」というタイトルをもつものが多かったことは、本稿でも示した当時の証言や代表誌の例から漠然と指摘されてもいたが、リヨングループの収集した基礎データによって初めて実証的な裏付けがなされたと言える。新聞・雑誌のカテゴリー分類には、いわば量化されない質の問題が関わっているため数字をそのまま評価するのは早計であろうが、こうした数値の蓋然性を念頭に置きながらもある程度「ジュルナル」の隆盛とその概念の変化を指摘できるのではなかろうか。『サヴァン誌』にジュルナルの一つの起源があることは従来殆んど指摘されていなかったが、このいわば一七世紀的ジュルナルと、「ジュルナル・ポリティーク」にみられるいわば一八世紀的ジュルナルには類似と相違の断層があり、本稿ではこれを『ガゼット』の問題と関連させて捉えた。政治ニュース報道の「ガゼット」がその形式からみて時代の要求に合わなくなっていたことは、さまざまな証言、購読数、経営実態から明白であり、本稿で扱った七〇年代、八〇年代のジュルナルの隆盛は、文字通り「ジュルナル」形式の報道への模索とも言えるのではなかろうか。この意味で、パンクックがジュナルの隆盛に果たした役割は大きいと言わざるをえない。実際に八〇年代に入ると、『ジュネーヴ誌』や『メルキュール』の成功によって、これを模倣した『ジュルナル・ポリティーク』が現われ、ジュルナルをタイトルにもつ政治誌が増加する。¹⁵ジュルナルの拡大には、この他に日刊誌『ジュルナル・ド・パリ』の影響と地方紙のジュルナル化なども考慮しなければならないとしても、パンクックの先駆的な役割は変わらない。すでに一章において、一七七〇年代に、一般情報誌、政治誌、地方新聞が増加し、これとジュルナルの増加とが関連することを指摘していたが、このうち少なくとも政治誌を中心にしたジュルナルの拡大にパンクックは大きく関与していたと考えられる。

最後に、本稿の論議は、「ジャーナリズムの成立」を論じるときに重要な意味をもつ。ジャーナリズムには、原義上からいえば、「ジュルナル」の概念の定着と、実体としてのジュルナルの普及が不可欠であるが、この点からみれば一八世紀にすでにこの状況が醸成されつつあったと言えよう。一般的にはフランスで本格的なジャーナリズムが生まれたのは一九世紀以降であると認識されているけれども、リヨングループのこれまでの共同研究のテーマは一貫して「アンシャン・レジム下のジャーナリズム」であって、その研究の意図や成果からみて成立期をアンシャン・レジム期に求めることがもはや共通認識になっていると考えられる。筆者はこの他、一八世紀フランスにおける「ガゼチエ」gazetier から「ジュルナリスト」journaliste への志向の変化や「ジュルナリズム」journalisme という用語自体の一八世紀後期における導入に注目しているが、ジャーナリズムの成立論議にはこうした語彙論的追究も必要である。いずれにしても、ジュルナル概念の問題はさらに実証的に検討しなければならない。またパンクックについてもさらに焦点を絞った分析や革命期の活動を併せて考察しなければならない。本稿はその鳥瞰図を示したにすぎず、残された課題は多いが、本稿で触れ得なかった諸問題については続論を試みたいと思う。

注

- (1) 一八世紀フランスの喜劇についてはとりあえず以下のものを参照。鈴木康司、「IV 古典主義とその対部 三喜劇」、「フランス文学講座4、演劇」、一九七七年、一四〇—一七九頁。
- (2) Jacques Brissot, *Mémoires*, éd. Perrot, t. 1, p. 84, cité par J. Trénard, *La presse française des origines à 1788* (以後 *La presse*. ヲ略ス) ; C. Bellanger et al., *Histoire général de la presse française*, tome 1, 1969, p. 199.
- (3) Cf., S. Tucoco-Chala, *Charles-Joseph Panckoucke & La librairie française 1736-1798, La diffusion des lumières dans la seconde moitié du XVIII^e siècle*, 1977. (以後 *Panckoucke*. ヲ略ス) ; id., *La diffusion des lumières dans*

la seconde moitié du XVIII^e siècle : Ch.-J. Panckoucke, *Un libraire éclairé (1760-1799)*, *Dix-huitième siècle*, vol. 6, 1974, pp. 115-128. (以後 La diffusion. と略す)

- (4) Cf. J. Proust, *L'Encyclopédie*, 1965, 平岡昇他訳『百科全書』、岩波書店、一九七九年、二二四—二三二頁。
- (5) S. Tucoc-Chala, *Panckoucke*, p. 251. 著名なD・モルネの『フランス革命の知的起源』においても、パンクックの言及はわずかである。D. Mornet, *Les Origines Intellectuelles de la Révolution Française*, 1933, 坂田他訳、『フランス革命の知的起源』、下、勁草書房、一九七一年、三八七、五〇一頁。また革命期のパンクックについては次の書に一部言及されている。Cf., B. Didier, *La littérature de la Révolution française*, 1988. 小西嘉幸訳、『フランス革命の文学』、白水社、一九九一年、七一頁。
- (6) 拙稿、『18世紀中期フランスにおける新聞・雑誌と『ガゼット』』、鳥取大学教養部紀要、第25巻、一九九一年、六九—九四頁。
- (7) J. Sgard, *Dictionnaire des Journaux 1600-1789*, 1991. (以後 *Journaux.* と略す)
- (8) *Id.*, *Dictionnaire des Journalistes 1600-1789*, 1976. (以後 *Journalistes.* と略す)
- (9) *Id.*, *Journaux.*, pp. 1131-1140.
- (10) *Ibid.*, pp. 1137-1140.
- (11) *Ibid.*, p. 1140.
- (12) *Ibid.*
- (13) *Ibid.*, Cf., P. Rétat, *Les journaux de 1789* *Bibliographie critique*, 1988.
- (14) *Ibid.*, p. 1132.
- (15) 『ガゼット』については以下を参照。拙稿、『フランス絶対王政期における『ガゼット』の成立について』、『人

文學報』第六三号、一九八八年。

- (16) 「一八世紀フランスにおける地方新聞—『アフィシユ』研究—」、鳥取大学教養部編、『歴史と社会』、一九九〇年、一二五—二六八頁。

- (17) 前掲書、二六六頁。Cf, L. Trénard, *La presse*, pp. 330-333.

- (18) J. Sgard, *Journaux*, pp. 870-878.

- (19) L. Trénard, *La presse*, p. 126.

- (20) 『サヴァン誌』については主に次の研究を参照。L. Trénard, *La presse*, pp. 124-137.; R. Birn, *Le Journal des Savants sous l'ancien régime*, *Journal des Savants*, no. 1, 1965, pp. 15-29.; M. Yardeni, *Journalisme et histoire contemporaine à l'époque de Bayle: History and Theory*, 12: 2, 1973, pp. 208-229. また九州大学所蔵の『サヴァン誌』(10 (1683) — 26 (1699)) を参照。

- (21) L. Trénard, *La presse*, p. 124.

- (22) すでに二〇〇—三〇〇頁刷り、また月刊誌(一七二一年)となる。

- (23) M. Yardeni, *op. cit.*, p. 222.

- (24) これは従来より一般的に言われていることであるが、さしあたり次の様な指摘を参照。J. Feather, *A History of British Publishing*, 1988; 箕輪成男訳、『イギリス出版史』、玉川大学出版部、一九九一年、一九一—一九二頁、「定期刊行物出版は、ひとたびイギリスに導入されると、すぐに際だってイギリス的な様式をとるようになったが、もともとこの伝統はイギリスではなくフランスにはじまったのである。新聞を除く最初の定期刊行物は一六六五年パリにおける『ジュルナル・デ・サヴァン』の出版であると一般に認められている。それは新刊書の月間書評誌であり、どちらかといえば自然科学に比重がかかっていた。同じ年に創刊されたイギリスの『王

- 『大辭全書新編』などのフランス雑誌から示唆を得ているのである。 Cf., R. -P. McCuthon, *The Journal des Savants and the Philosophical Transaction of the Royal Society; Studies in Philology*, XXI, 1924, pp. 626-628.; R. Birn, *op. cit.*, p. 21.
- (5) Cf., M. Yardeni, *op. cit.*, p. 224.; R. Birn, *op. cit.*, p. 24. その他、タイプチェンジ発行や、*Acta Eruditorum* (1682-1776) の回巻である。
- (6) *Dictionnaire de L'Académie Française*, 1695, Slatkine Reprints, 1968, Tome 1, p. 370.
- (7) R. Birn, *op. cit.*, pp. 15-16.
- (8) Cf., L. Ténard. La presse., p.126.
- (9) J. D. Popkin, *Revolutionary News, The Press in France 1789-1799*, 1990. p. 17. 例えば『百科全書新聞』 *Journal encyclopédique* の編集者 D・ヘノーは、『サヴァン誌』に年三〇〇リーブルの賦課金を支払っている。 Cf., S. Tucoco-Chala, *Panckoucke*, p. 98.
- (10) L. Ténard, La presse., p. 165.
- (11) *Ibid.*
- (12) E. L. Eisenstein, *Grub Street Abroad*, 1992, p. 10.
- (13) *Dictionnaire de Trévoux*, 1721. pp. 896-897.
- (14) D. -F. Camusat, *Histoire critique des journaux*, t. I, p. 13, cité par, L. Ténard, La presse., pp. 126-127.
- (15) *Dictionnaire de la langue française, ancienne et moderne, de Pierre Richelet*, tome II, 1759, Reprint 1987, p.471.
- (16) Cf., A. Rossel, *Le faux grand siècle 1604-1715, Histoire de France à travers les journaux du temps passé*,

- 1982, p. 34-36.; M. Yardeni, *op. cit.*, p. 220.
- (35) *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et métiers*, tome 8, 1765, Reprint 1967, pp. 896-897.
- (38) Cf., A. Rossel, *op. cit.*, p. 34. ; *Id.*, *Revue des journaux du temps passé*, 1989, p. 7. ; L. Trénard, La presse., p. 168. ; E. L. Eisenstein, *op. cit.*, p. 12.
- (39) パンクックの経歴については前掲のS・チュコーンヤラの著書「論文の他」主に次のものを参照。H.-J. Martin, *A la veille de la Révolution : crise et réorganisation de la librairie, Histoire de l'édition française*, tome 2, Le livre triomphant, 1984, pp. 521-525.; W. Murray, Panckoucke ; J. Sgard, *Journalistes.*, pp. 295-296.
- (40) 後にアカデミー・シヤンスの会員となるクレロー Clairaut (1713-1765) の学友であった。
- (41) パンクックの地方新聞については次を参照。L. Trénard, La presse., p. 378.
- (42) W. Murray, *op. cit.*, p. 295.
- (43) H.-J. Martin, *op. cit.*, p. 521.
- (44) このような多額の資金調達には、現在でも不明の部分が多く詳細はわからないが、「五〇〇ルイ金貨の借金を負って友人も信用もなく」パリにきたパンクックが四年後には、五〇万リーヴルの資産家になっている (S. Tucoo-Chala, *Panckoucke*, p. 93.)。この金額はH・ーJ・マルタンの論文では、それぞれ二〇ルイ金貨、六〇万リーヴルという金額になっている。(H. J. Martin, *op. cit.*, p. 521.)
- (45) W. Murray, *op. cit.*, p. 296.
- (46) H.-J. Martin, *op. cit.*, p. 522.
- (47) Cf., S. Tucoo-Chala, *Panckoucke*, pp. 533-539.

- (48) 『百科全書』との関わりについては、前掲の J・ブルーストの翻訳が詳しい。Cf., R. Darnton, *The Business of Enlightenment*, 1979.
- (49) S. Tucoco-Chala, *Panckoucke*, p. 130.
- (50) ルソーとの関わりについては次の論文を参照。J. B. Watts, Jean-Jacques Rousseau and Charles-Joseph Panckoucke, *Philological Quarterly*, 38-4, 1959.; 以後 Jean-Jacques Rousseau. ヽ_略。P. Caravaggio, Une lettre inédite de J. -J. Rousseau à Panckoucke, *Dix-huitième siècle*, vol. 14, 1982, pp. 237-242.
- (51) ヴォルテールとの関わりについては次の論文を参照。J. B. Watts, Voltaire, Christin and Panckoucke, *French Review*, t. 32, 1958, pp. 138-143.; F. Caussy, Letters inédits de Voltaire à Panckoucke, *Mercure de France*, vol. 84, 1910, pp. 83-94.
- (52) H. -J. Martin, *op. cit.*, p. 522.
- パンクックのジャーナリズム活動については前掲の S・チュコーシヤラの研究が最も包括的で詳細である。近年のその他の研究者によるパンクックへの言及もこれに負うところが大きい。とくに、グラフや表を駆使した数量分析が多用されている。またそれ以前のものとしては、G・B・ワッツの次の論文が詳しい。よって本稿でも主にこれらに依拠しつつ、諸研究との照合を図りながら検討する。Cf., J. B. Watts, Charles-Joseph Panckoucke, "L'Atlas de la librairie française", *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, 68, 1969, pp. 69-205. (以後 Panckoucke. ヽ_略)
- (53) Cf., H. Gough, *The Newspaper Press in the French Revolution*, 1988, p. 4.; J. Sgard, *Lumières et leurs du XVIIIe siècles 1715-1789*, 1986, pp. 209-216.
- (54) H. Gough, *op. cit.*, p. 8.; Cf., L. Trénard, *La presse*, pp. 189-199.

- (55) 外国刊行の定期刊行物は、郵送料の関係でフランス国内のそれよりも高価であったが、五〇年代以降の書籍業者ダヴィッドや外務大臣シヨワズールらによる改革をへて改善された。拙稿、「一八世紀中期フランスにおける新聞・雑誌と『ガゼット』」七六頁。Cf., E. Hatin, *Les Gazettes de Hollande et la presse clandestine aux*

XVIIe et XVIIIe siècles, 1865, pp. 36-49.

- (56) S. Tucoc-Chala, *Panckoucke*, p. 193.
- (57) L. Trénard, *La presse*, p. 197.
- (58) J. Sgard, *Journaux*, pp. 754-755.
- (59) *Ibid.*, pp. 628-629.
- (60) H. - J. Martin, *op. cit.*, p. 522.
- (61) S. Tucoc-Chala, *Panckoucke*, p. 198.
- (62) *Aviseur National*, no. 11. 11-1-93. p. 42, cité par, S. Tucoc-Chala, *Panckoucke*, p. 197.
- (63) Sur le Journal Politique, réuni au Mercure, *Mercure de France*, 5-12, 1789.
- (64) *Journal des savants*, 12-1772.
- (65) J. B. Watts, *Panckoucke*, p.157.
- (66) Cf., L. Trénard, *La presse*, p. 169; *Dictionnaire de l'Académie Française*, 1932. L・トレナルが指摘するように、現実には「ガゼット」と「ジュルナル」が混同して使用されるケースがあった。例えば、「ガゼット」というタイトルを持ちながらジュルナル・スタイルのものとしては、一七二二年の『ガゼット・デ・サヴァン』 *Gazette des Savants ou relation de livres qui paraissent dans toutes l'Europe* 一七四四―一六六
年のアルノー・シユアールによる『ガゼット・リテレール』 *Gazette littéraire de l'Europe* 一七六一―一七三

年の『ガゼット・サリュテール』 *Gazette salulaire*。そして前述の『ガゼット・デ・ガゼット』などである。逆に本稿で示したように、「ジュルナル」というタイトルを持ちながらガゼット・スタイルのものもあり、オランダの一六八八―一七九二年の『ヌーヴオー・ジュルナル・ユニヴェルセル』 *Nouveau Journal universel*。前述の日刊紙『ジュルナル・ド・パリ』などであり、増加していった。

- (67) ランゲ、ラ・アルプ、L・S・メルシエなどのジャーナリストの一七七〇年代の動きについては、次の論文が詳しい。Ninna R. Gelbert, "Frondeur" Journalism in the 1770s, *Eighteenth Century Studies*, 17, 1984, pp. 493-514. ゲルバートの主張によると、のちの革命思想と呼ばれるものは、秘密出版物によって拡められていただけではなく、すでに革命の一五年も前から検閲出版物のなかにも流れていた。

- (68) G. B. Watts, *Panckoucke*, p. 160; S. Tucoo-Chala, *Panckoucke*, p. 199.

- (69) *Ibid.*, p. 203.

- (70) *Ibid.*, pp. 200-206.

- (71) S・チュコーシヤラによる部数の算定方法には十分な言及がなく、問題なしとしないが、J・B・ワッツなどの研究や近年の数量分析と照らし合わせてみれば、おおむね妥当であると言えるだろう。

- (72) *Mémoires de Brissot, op. cit.*, p. 62, cité par, S. Tucoo-Chala, *Panckoucke*, p. 204.

- (73) *Ibid.*, p. 210.

- (74) 例えば、一七七八年六月時点で、ド・ラ・プラーヌ (4000L)・マルモンテル (3000L)・アベ・レイナル (2000L)・マラン (1000L)・シャンフオール (700L)・アルノー (800L) などで総計二万八五〇〇リーヴルにもなっていた。 Cf., *Ibid.*, p. 216.

- (75) L. Trénard, *La presse*, pp. 214-216.

- (76) 『メルキュール』誌の原文との照合は、同志社大学所蔵のリプリント版を使用した。 *Mercure*, 1721-1723; *Mercure de France*, 1724-1790; *Mercure français*, 1791-1799.
- (77) *Arch. Affaires étrangères, Affaires intérieures, France*, 11386. fo., 59, cité par, S. Tucoco-Chalat, *Panckoucke*, p. 193 et p. 218.
- (78) S. Menant, L' Audience de la poésie en 1778 d'après les périodiques; P. Jansen et al., *L'Année 1778 à travers la presse traitée par ordinateur*, 1982, pp. 227-228.
- (79) *Ibid.*, p. 228.
- (80) 『メルキュール』は七九年七月から週刊になった。購読料は、パリ二四リーヴル、地方三二リーヴルと変わらなかった。
- (81) J. Peuchet, *Bibliographie universelle*, 26, pp. 263-266, cité par, G. Watts, *Panckoucke*, p. 175.
- (82) G. Feyel, *Gazette de France* ; J. Sgard, *Journaux*, p. 493.
- (83) S. Tucoco-Chala, *Panckoucke*, p. 224.
- (84) G. B. Watts, *Panckoucke*, p. 191. ただし、ワッツの指摘によれば、新刊書や音楽などに関する「内容案内」Prospectus et avis particuliers de la librairie や、のち革命期になると革命の動きを伝えるための「補遺」supplément が新たに掲載されたように。
- (85) S. Tucoco-Chala, *Panckoucke*, p. 229.
- (86) *Ibid.*
- (87) G. B. Watts, *Panckoucke*, p. 191.
- (88) H. -J. Martin, *op. cit.*, p. 522.

- (89) L. Trénard, *la presse*, p. 161.
- (90) J. D. Popkin, *op. cit.*, p. 17.
- (91) G. B. Watts, Jean-Jacques Rousseau, p. 481.
- (92) S. Tucoco-Chala, *La diffusion*, p. 120.
- (93) *Id.*, *Panckoucke*, pp. 390-391.
- (94) *Ibid.*, p. 393.
- (95) *Ibid.*
- (96) *Ibid.*, p. 208.
- (97) パンクックから国務大臣筆頭書記官にあてた次のような書簡によって、この特認もヴェルジェンヌの承認を得たことがわかる。「ヴェルジェンヌ閣下が私に、ジュルナル・ポリテイクの独占的特認を与えて下さったことをつつしんで申しあげます。」(一七七八年五月)

Cf., *Ibid.*, p. 211.

- (98) N. R. Gelbert, *op. cit.*, p. 496.
- (99) S. Tucoco-Chala, *Panckoucke*, p. 232.
- (100) *Ibid.*, p. 236.
- (101) *Id.*, *La diffusion*, p. 121.
- (102) *Ibid.*, p. 122; *Id.*, *Panckoucke*, p. 238. パンクックはまた、新刊書の広告を『メルキュール』や『ガゼット』に掲載する試みを行った。しかし、同時期のイギリスのような広告の発達は見られない。

- (103) *Id., Panckoucke*, p. 223.
- (104) *Ibid.*, p. 239.
- (105) Cf., *Ibid.*, p. 232; *Id.*, La diffusion., p. 121.
- (106) *Ibid.*, p. 120.
- (107) *Id., Panckoucke*, p. 244; *Id.*, La diffusion., p. 122.
- (108) E. Hatin, *Histoire de la presse en France*, t. 1, 1869, p. 311.
- (109) ここでは、S・チュコーシヤラの試算に依拠する。シヤラによると、購読数と賦課金額がわかれば収入は比較的算出しやすいが、難しいのは編集・運営費であるという。
- (110) S. Tucoc-Chala, *Panckoucke*, p. 251.
- (111) *Id.*, La diffusion., p. 119.
- (112) H. Gough, *op. cit.*, p. 5.
- (113) E. L. Eisenstein, *op. cit.*, p. 12.
- (114) D・モルネ前掲書、下五〇七―五〇八頁。
- (115) 本稿では、紙幅の関係で、八〇年代のジュルナル一覧を提示することができなかったが(附表参照)、例えば、八〇年代のジュルナル・ポリテイクとしては次のようなものがある。*Journal politique, historique* (1780, Francfort) ; *Journal politique, civile* (1781, Londres) ; *Journal politique et littéraire* (1784, Londres) ; *Journal littéraire et politique* (1786, Bruxelles) ; *Journal politique national* (1789-1790, Versailles) . また有名な『ライデン・ガゼット』はその副題を一七九八年には「ヌーヴェル・ポリテイク」

Nouvelles politiques に、さらに一八〇四年には「ジュルナル・ポリテイク」 Journal politique に変更している。

(なお、本稿は、一九九二年度文部省科学研究費・一般研究(C)による研究成果の一部である)

附表 アンシャン・レジーム下の『ジュルナル』一覧

(1640-1779年, ただし1780年代を除く)

(J. Sgarad, *Journaux.*, のデータに基づき集計, 作成。なお下線は本文言及の主な新聞・雑誌)

定 期 刊 行 物 名	刊行期間	刊 行 地
① Journal des principales	1646-1754	Paris
② Journal poétique de la guerre	1649	Paris
③ Journal de Parlement	1649-1653	Paris
④ Le journal contenant les nouvelles	1652	Paris
⑤ Journal de tout ce qui s'est passe	1652	Paris
⑥ Nouveau Journal historique	1660	Paris
⑦ <u>Journal des savants</u>	1665-1792	Paris
⑧ Journal du Journal	1666	Saumur
⑨ Journal du Palais	1672-1695	Paris
⑩ Journal de la Ville de Paris	1676	Paris
⑪ Journal des avis et des affaires	1676	Paris
⑫ Journal des nouveautés du chant	1678	Paris
⑬ Journal ecclésiastique 1	1680	Paris
⑭ Journal général de France 1	1681	Paris
⑮ Journal de médecine 1	1683	Paris
⑯ Le Journal chrétien 1	1685	Paris
⑰ Journal de médecine 2	1686	Paris
⑱ Journal universel 1	1687	Paris
⑲ Journal historique et véritable	1689	Rotterdam
⑳ <u>Journal d'Amsterdam</u>	1694-1696	Amsterdam
㉑ <u>Nouveau Journal des savants</u>	1694-1698	Rotterdam
㉒ Journal historique de l'Europe	1695	Strasbourg
㉓ Journal historique des Assemblées	1700	Paris
㉔ Journal littéraire	1705	Paris
㉕ <u>Journal d'Utrecht</u>	1710-1713	Utrecht
㉖ Journal littéraire 1	1713-1737	La Haye
㉗ <u>Journal historique, politique</u>	1719	Amsterdam
㉘ <u>Journal historique et politique 1</u>	1720	Bern
㉙ Journal littéraire 2	1727	Luxembourg

定 期 刊 行 物 名	刊行期間	刊 行 地
③⑩ Le Journaliste amusant	1731	Paris
③⑪ Journal historique de la République	1732-1733	Leyde
③⑫ <u>Journal politique et littéraire</u>	1736-1738	La Haye
③⑬ <u>Journal helvétique</u>	1738-1769	Neuchâtel
③⑭ <u>Journal de Berlin</u>	1740-1741	Berlin
③⑮ <u>Le Journal universel 2</u>	1743-1748	La Haye
③⑯ Journal historique du commerce	1745	Genève
③⑰ Journal littéraire universel	1745	Lausanne
③⑱ Journal des affaires de l'Europe	1746	Avignon
③⑲ Journal des audiences et arrêts	1746-1778	Rennes
④① Journal des savants d'Italie	1748-1749	Amsterdam
④② Le Journaliste impartial	1750-1751	Lucerne
④③ Journal Britannique	1750-1757	Londres
④④ Journal économique ou Mémoires	1751-1772	Paris
④⑤ Journal historique	1752	
④⑥ Journal du citoyen	1754	La Haye
④⑦ Journal littéraire	1754-1755	Varsovie
④⑧ Journal étranger 1	1754-1762	Paris
④⑨ Journal chrétien 2	1754-1764	Paris
④⑩ Journal épistolaire	1755	Berlin
⑤① Journal maritime de Bayonne	1756	Bayonne
⑤② Journal maritime de Bordeaux	1756-1757	Bordeaux
⑤③ <u>Journal encyclopédique</u>	1756-1794	Liège
⑤④ Journal militaire	1757	Londres
⑤⑤ Journal de musique 1	1758	Paris
⑤⑥ Journal de Metz	1758-1776	Metz
⑤⑦ Journal villageois	1759	Amsterdam
⑤⑧ Journal de commerce 1	1759-1762	Liège
⑤⑨ <u>Journal des dames</u>	1759-1777	Paris
⑥① Journal des Journaux	1760	Mannheim
⑥② Journal de la charité	1760	
⑥③ Journal ecclésiastique 2	1760-1792	Paris

定 期 刊 行 物 名	刊行期間	刊 行 地
⑥2 <u>Journal historique, politique...</u>	1761	Pezenas
⑥3 Journal des sciences et des arts	1761	Moscow
⑥4 Journal des deuils	1761-1764	
⑥5 Journal de clavecin 1	1762-1771	
⑥6 Journal de jurisprudence	1763	Bouillon
⑥7 Journal du Grand conseil	1764	Paris
⑥8 <u>Journal des spectacles de la cour</u>	1764-1785	Paris
⑥9 <u>Gazette des gazette ou Journal...</u>	1764-1793	Bouillon
⑦0 Gazette Britannique ou Journal...	1765	
⑦1 Journal de Saint-Domingue	1765-1766	Cap-Français
⑦2 Journal de l'agriculture	1765-1774	Paris
⑦3 Journal des spectacles	1766	Paris
⑦4 Journal de Bruxelles	1766-1767	Bruxelles
⑦5 Journal des Beaux-Arts et des...	1768-1775	Paris
⑦6 Journal d'éducation 1	1768-1769	Paris
⑦7 Journal historique et physique	1769	
⑦8 Journal de législation	1769	Paris
⑦9 Journal de commerce 2	1769	
⑧0 Journal Historique des Sciences	1770	Francfort
⑧1 Journal Polonais	1770	Varsovie
⑧2 Journal de musique 2	1770-1777	Paris
⑧3 Journal de l'avocat Bas-Rhin	1771	
⑧4 Journal du Monde	1771	Lyon
⑧5 Journal littéraire	1772-1776	Berlin
⑧6 <u>Journal historique et politique 2</u>	1772-1792	Paris
⑧7 <u>Journal historique et politique 3</u>	1772-1791	Liège
⑧8 Journal de musique des Deux-Ponts	1773	Deux-Ponts
⑧9 Journal historique et littéraire	1773-1794	Luxembourg
⑨0 <u>Journal de politique et de littérature.</u>	1774-1778	Paris
⑨1 Journal de lecture 1	1775-1778	Paris
⑨2 Journal Anglais	1775-1778	Paris
⑨3 Journal-Singe	1776	Londres

定 期 刊 行 物 名	刊行期間	刊 行 地
⑨④ Journal des Sciences et des...	1776-1778	Paris
⑨⑤ Journal de Monsieur	1776-1783	Paris
⑨⑥ Journal étranger 2	1777	Paris
⑨⑦ Journal économique et politique	1777	Genève
⑨⑧ Journal littéraire de Varsovie	1777-1778	Varsovie
⑨⑨ <u>Le Journal français</u>	1777-1778	Paris
⑩① Journal français, italien...	1777-1778	Londres
⑩① Mélanges littéraires, ou journal...	1777-1778	Paris
⑩② Journal des théâtres	1777-1779	Paris
⑩③ <u>Journal de Paris</u>	1777-1840	Paris
⑩④ Journal de Lorraine	1778	Nancy
⑩⑤ Journal d'airs pour le Cistre	1778	Paris
⑩⑥ Le Journaliste de Hambourg	1778	Hambourg
⑩⑦ Journal militaire 2	1778-1780	Paris
⑩⑧ Journal de Marine	1778-1780	Brest
⑩⑨ Gazette ou Journal universel...	1778-1786	Deux-Ponts
⑩⑩ Journal politique de Bruxelles	1778-1789	Paris
⑩⑪ Journal de Nancy	1779-1781	Nancy
⑩⑫ Journal de littérature, des...	1779-1783	Paris
⑩⑬ Journal d'ariettes italiennes...	1779-1795	Paris